
とある科学の電磁侵犯（ハッキングパルス）

バラランシャ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の電磁侵犯ハッキングパルス

【NNコード】

N0782N

【作者名】

バラランシャ

【あらすじ】

ある1人の青年が居ました。

青年は性格が少し捻くれていて、いつもパソコンからあらゆる情報を見ていきました。

ある時はアメリカの某航空宇宙局の極秘データを覗き、またある時はロシア政府の極秘文書を公に曝したりした。

だが、彼にとってはそのどれもが単なる暇潰しだった。

しかし、彼の人生は1人の少女と出会い、大きな分岐路に直面した。

この物語は、そんな青年と少女が出会いから始まります。

設定（主人公・天壌寺学園・電磁侵犯・微ネタバレ）（前書き）

12 / 3 : 容姿・服装・能力詳細を追記

12 / 6 : 学園詳細微修正

設定（主人公・天壌寺学園・電磁侵犯・微ネタバレ）

名前：振屋 一光

読み：ふるや かずみち

身長：172cm

体重：68kg

髪型：ほぼ黒だが先端だけ白の短髪。

瞳色：灰色。

容姿：一般的の男子高校生の平均的な体格。

服装：上はチェック柄のものを好んでおり、下は大抵Gパン。

性格：人を嘲ったり不幸にするのが好き。

所属：学園都市第7学区・天壌寺学園高等部（2年生）

職業：高校生

住居：天壌寺学園学生寮301号室

レベル：大能力者レベル⁴

能力：ハッキングパルス
電磁侵犯

備考：現在、自身の都合により天壌寺学園を休学中

天壌寺学園の詳細

第7学区に存在する学校で、小中高大のエスカレーター式の学校。

入学する為の最低条件が能力の発現である為、在学している生徒は全員能力者。

低能力者レベル1→大能力者は在籍しているが、超能力者は在籍していない。レベル5

大能力者レベル4も一光を含めて12人しか存在しない。

また、この学園では能力測定を月に1度は行っており、生徒たちの能力の微々たる変化も記録し、さらにその成長度により能力開発のカリキュラム時間割りの内容を変更したり、重点的にしたりと学園側が計画を組んでくれる。

それにより、元々低能力者レベル1だった能力者が強能力者レベル3や大能力者レベル4まで成長した実績もある。

因みに、大霸星祭では常盤台中学、長点上機学園に続く成績を残すが、上位2校が注目を集めているためにあまり注目されない。

能力：電磁侵犯の詳細ハッキングパルス

振屋一光の能力である電磁侵犯は、自身の放つ特殊な電磁波で様々な端末に入り込み、端末の中にあるデータや映像を覗き見たり、システムを弄つて誤作動させたりすることができる。

データや映像を覗き見る場合、自身の脳内で映像化することができ、さらに端末に表示したい場合は映像化した電波を対象の端末に流すことで表示することが可能。

ハッキングする際には別に端末に触れる必要はなく、最長で10m離れた位置の端末からもハッキングすることができ、端末の中に誰かの連絡先が登録されていると、その端末から登録者の端末へのハッキングが可能。

また、この能力の真骨頂は人と接触した際に発動することで、接触した人物の記憶を覗くことができる事と、自身に対してブーストを掛けることができる事の二つ。

記憶を覗くことができる理由としては、『ある科学の超電磁砲』で御坂美琴と木山春生の間に起きた現象と同様。電気を介して回線を繋ぐことで、相手の記憶に強制リンクするため。

この能力は自身にも使用することができるため、もし自身が忘れていても能力を介して記憶の根底から探し出すことができる。

また自己ブーストに関しては、同時に任意で痛覚を遮断することができる為、動かなくなつた四肢を能力によつて発した電気信号で誤認させることで、無理矢理動かすことが可能。

だが、それをした場合、能力を解いた時の反動は大きく、最悪の場合は死ぬ可能性もある為、自己ブーストは最大でも20分、痛覚遮断と併用で10分までしか使用できない。

因みに一光の発する電磁波は電撃エレクトロマスター使いの中では特異なもので、例え超能力者第3位である『超電磁砲』御坂美琴であろうとも感知・察知することは至難。

プロローグ・青年と少女（前書き）

はい、完全に見切り発車な上、他にも執筆しなければならない小説があるにも関わらずに新しく書いてしまった。

タイトルも適当に付けたので後で変更するかもです。

…………どうしようもないですね、俺（汗

とは言つても、他の連載中小説の執筆に今現在気が乗らない為、暇潰し程度に更新していくつと想います。

なので不定期更新ではありますが、それでも良い方はお読みください。

それでは、『プロローグ・青年と少女』をご覧ください。

プロローグ・青年と少女

「 つと、これでいいか、初春？」

学園都市、風紀委員第一七七支部。

「 」には今、一人の青年がPC画面から視線を外し、その視線を後ろにいる頭に花をいくつも飾っている少女 初春飾利へ向ける。

「あ、はい！ ありがとうございました、振屋先輩！」

青年 振屋 一光は初春に気にするなど一言もつと、椅子から立ち上がる。

すると初春はすぐに一光の座っていた椅子に座り、PCに向かうと作業を開始した。

しかし作業を始めてすぐに、初春は一光に感嘆の声を漏らす。

「凄い、私が調べても分からなかつた情報がこんなに・・・」

それを聞いた一光は、何を言つてもなく初春の頭を軽く撫でる。

初春は一瞬照れるが、直ぐに作業へと戻る。

「じゃあ俺は帰るわ。なんかあつたらまた呼んでくれ」

そう言いながら、一光は初春の頭を撫でていた手を頭から離す。

と、初春があつ・・・と声を漏らすが、何事もなかつたようにすぐ
に作業に戻る。

「今日はオムライス作つて待つてるからな。ちゃんと仕事しちよ、
飾利」

不意打ちだつたのか、初春は顔を真つ赤にして一光をポカポカと叩くが、それもすぐにやめPCに向き直る。

まあこの場合はそつぽを向いたと言つても過言ではないのだが・・・

その様子を見て苦笑する一光は、それじやあ頑張れよと一言告げて、一七七支部を後にした。

一光と初春、2人は今ではとても仲が良いが、その出会いはちょっと良いものとは言えなかつた。

この物語は、そんな2人の、振屋一光と初春飾利の、微妙な出会いから始まります。

次回
電侵魔術師

ハッキング・ワイザード

第1話・電脳魔術師（ハッキング・ウェイザード）

薄暗い部屋の中、響くのはキーボードの入力音とマウスのクリック音のみ。

「うわ、イタリア政府の奴ら、こんな情報隠してたのかよ。マジな
いわあ・・・・・どっかのマスク//にでもリークしておくれか」

そんな中、PCディスプレイの明かりに照らされていた青年の顔が
嘲る様な笑いを見せるが、直ぐに無表情な顔になる。

「・・・・・はあ、これで大抵の国家政府には潜り込んだし・・・・
どひするかなあ」

青年は部屋のカーテンを開き、窓を開けて外の空気と太陽光を部屋
に入れる。

「・・・・・そのこと、学園都市の企業組織を相手にでもして色々
探つてみるか?」

そう呟いた青年の表情は、やはり無表情だった。

「電侵魔術師、ハッキング・ウィザード」

ですか？」

場所は変わり、ここには風紀委員第一七七支部。^{ジャッジメント}

「ええ、そうですの。どうやらその方は学園都市の様々な研究所のデータをハッキングしているらしいんですの」

現在、ツインテールの少女　白井黒子は、パソコンに向かって作業をしている花飾りの少女　初春飾利と今話題になつている事件の容疑者について話していた。

「私も呼び名だけは聞いたことはありますけど、本当にその人なんですか？」

ハッキング・ウィザード
電
侵魔術師。

学園都市に広まっている都市伝説の中でも一番信憑性の高い都市伝説。

どんな組織のどんなセキュリティでも搖い潜り、重要データや極秘情報を盗み出し、マスクミにそのデータを流す。

そしてそのハッキングされたPCには、そんな形跡が全く残されていない。

そのことから、様々な推測がネット上に飛び交っている。

高位の電撃使いではないのかとか、部屋には国一つが買えるほどスピーカーが置かれているとか、信憑性の高いものから低いものまで

エレクトロマスター

様々だ。

「全く形跡を残さないのが電侵魔術師なんですよ？ それなのに何故」

「ええ。確かにハッキングされた形跡はありませんでしたわ。ですが、だからこそ、その方しかいらっしゃらないんですね」

白井の言葉を聞いた初春は、頭の上に？を浮かべる。

そんな初春を気にすることなく、白井はその理由を話し始めた。

「先程言ったように、確かに殆ど形跡はありませんでした。ですが、ある研究所では何故か極秘の情報がマスコミにリークされていました」

それを聞いた初春は、少し納得した。

が、それでも腑に落ちない部分があった。

「でも、それだけで判断することは時期尚早ですか？」

「確かにそうかもしません。ですが、こんなものを残されでは誰でもその方がやったとしか思いませんわ」

そつ言いながら、白井は自身の端末を操作してあるものを初春に見せる。

そこには『あんたらの極秘情報はちやんとマスクにリークしどいたからありがたく思つてくれ。まあその頃にはあんたらは警備員に捕まつてるかもしれないけどな。それじゃあ、精々逃げ回れよ。アンチスキル
ハッキング・ワイザード
電侵魔術師』と書かれたメモデータが表示されていた。

「これは……」

「マスクには伏せていますが、この方がこの件に関するのは明白。私たちはこの方がどなたなのかを突き止め、話を聞く必要がありますの。私はその辺りに詳しい方に話を聞いてきますので初春はネットなどで情報を集めてください」

「はい！ 分かりました！」

初春の返事を聞いた白井は、テレポーター空間移動で直ぐに聞き込みに向かった。

「よし、私も頑張りますよ！」

などと意気込んだ初春だったが、結局その日は2人ともぼしい情報を見つけられずに帰路に着く。

「おーい嬢ちゃん。どうしてくれんだ、ええ？」

「や、やめてくださいー！」

翌日、初春は放課後になるとすぐに一七七支部へと向かっていた。が、その途中でスキルアウトの男とぶつかってしまい、今現在絡ま
れている。

「ああて、ビリ落とし前つけでもりおつかあ？」

厳つい男3人に囲まれてしまい、初春は怖くて体を強張らせた。

「おーい、あんたら何やってんだ？」

と、そんな状況の中、誰かが3人の男に声を掛ける。

声を掛けられた方に視線を向けると、そこには紺と黒のチェック柄のTシャツとGパン、先端だけが薄ら白い髪で灰色の瞳の青年が立
つていた。

「ああ？　てめえには関係ねえよ！　どうか行け！！」

そんな青年の登場を邪魔に思つた3人は、みなながら青年を睨みつける。

しかし初春は、じっとばかりに助けてくれと言つ視線をその青年に向ける。

・・・・が、そんな視線を青年はあつさり裏切つた。

「あ～・・・それもそいつすね。んじゃ、俺はこの辺で」

「　　・・・え？」

初春はともかく、男たちも信じられないものを見る様な瞳で青年を見る。

普通なら、「その娘を離せ！」などと言つセリフを吐く場面だが、彼はそんな期待を裏切りその場を立ち去りうとする。

男たちは疑問に思いながらも自分たちの中で自己完結し、その視線を初春へと戻す。

それに気づいた初春は、呪い殺すような涙目で青年を睨みつける。

直後、初春はその青年の身体の周囲にパチッと電気が迸るのが見えた。

今のは何だったのかと思ったが、現在は目の前の状況を何とかしないため、そちらに思考を戻そうとする。

その時だった。男たち3人のケータイが同時に鳴り出した。

何事かと思い、3人はすぐにケータイに出る。

刹那、電話口の向こう側から離れていても分かるほどの怒声が響いてくる。

『ちょっと恭也！ 私以外に何人も付き合つてる女がいるってホントなのー？』

「ま、眞子ちゃんー？ そ、そんな事あるわけ

『じゃあこの写真は何よーー！』

その言葉と同時にその男のケータイにメールが届く。

それを聞き、内容を確認した男は驚愕した。

そのメールには、男を中心に何人もの女性が彼を囲むように写っていた。

・・・・・全員が全裸で。

「」、これは

「

『もう良いわよ！　あんたがこんなやつだと思わなかつたわ！！！別れてやるんだから……』

そう怒鳴りつけると同時に通話が終了。

男はこんなことじてゐ場合「じゃねえと叫びながらダッシュで彼女の元へと向かつていった。

『康夫！　あんた何してんの！！　私はあんたをそんな子に育てた覚えはないわよ！！』

「か、母ちゃん！？　一体何の話

」

突然の母親からの電話に驚き、理由を聞こうとした男だったが、直後に届いたメールを見てその理由を理解した。

『あんたがそんな子だったなんて知らなかつたわ！！　も「私たちはあなたと親子の縁を切るからね！！　金輪際家に帰つてこないで！！！』

「ちよ、母ちゃん！？　ま、待つて！　話を聞いてくれって……」

そのメールには、男が女の子と情事を行つてゐる写真が添付されていた。

・・・そう、女性ではなく女の子なのだ。

見た目や服装、持ち物を見て判断すると、その添付写真に写っている女の子は・・・・小学生らしい。

男はすぐにその場を駆け出し、親の元へと向かい出した。

『和明！ お前最高だな！ まさかネットで自分の痴態曝すなんて！！』

「はっ？ 何言つて

」

さつきの男同様、この男も理由を聞こうとした直後にメールが届く。男は恐る恐るメールを開くと、そこには男が複数の男性に全裸で攻められている姿が写っていた。

それを見た瞬間、男の顔からさあっと血の気が引いていき、男はケータイの通話を切るとすぐに皿をへと戻る。

そして、その場に残されたのは

状況が上手く呑み込めていない初春だけ

だつた。

「・・・・え、えっと・・・結局、助かっただんですか？」

「まあ、それは大変でしたわね」

「本当にですよ！ もうあんな思いはしたくありません」

ジャッジメント
風紀委員第一七七支部。

初春は今、先程の出来事を白井に愚痴りながら電侵魔術師について

ハッキング・ウィザード

の情報を探している。

「それにしても、声を掛けたが結局は何もせずに立ち去った青年のことか？」

「知りませんよー。もうあんな人の事、思い出したくもありません」

自身のピンチに声を掛けたが結局は何もせずに立ち去った青年のことか？」

しかし、その青年の話を聞いた白井は、何かが引っ掛かったのか考え込む。

「……初春。その殿方が立ち去ろうとした時、電気が見えたと仰っていましたが」

「あ、はい。見間違いかもしれませんが、御坂さんの出すよつものに似てたので」

それを聞き、白井は少し思案すると端末を弄り出す。

白井は何かの書類に次々と目を通していく。と、その動作がピタリと止まる。

「初春、あなたが見た男性はこの方ではなくて？」

そう言いながら白井の端末に表示された書類に視線を向ける初春。

直後、彼女の目が見開かれ、あーーー！ と言ひ声が響き渡る。

「そうです！ この人です！！ ・・・・ってあれ？ なんで白井さんがこの人の書類を？」

端末に表示されていたのは、確かに初春が見た青年だった。

が、何故白井は都合良く彼の書類を持っていたのか、それが分からなかつた。

「実はこの書類、アンチスキル警備員から頂いたハッキング・ワイヤード電侵魔術師と思わしき人物の書類なんですね」

「ええ！？ そうなんですか！？」

「とは言つても、能力からピックアップしただけのリストのようですが、今回はそれが当たつたようですね」

「ですが、どうして彼だと？」

「その殿方が去つた直後にスキルアウト達に連絡が入つたと言ひことは、その方が声を掛ける以前に彼らの写つた写真を彼らの端末かパソコン、もしくは知り合いの端末やらから探し出し、さらにはメ

ールを送信、またはネットに公開した。つまり彼は、その短時間でハッキング・ウィザードこれらのことができたと言う訳です。そんな事、件の電侵魔術師の様な人物しかできませんわ」

白井の推理を聞き、初春はなるほどと感嘆した。

だが、それと同時に疑問も浮かんだ。

「だったらなんで私を見捨てたんでしょうか?」

「さあ? それは本人に聞いた方が早いのでは?」

そう言つと白井はどこかに連絡を入れる。

暫く何かを話してから通話を切る。

「今その殿方をこちらに連れてくるよう手配いたしましたわ。話はハッキング・ウィザードその方が来てからにいたしましょう」

「は、はい!」

そう返事をした初春は、白井の端末のデータをPCの方に転送してもらい、ディスプレイに表示する。

そこには青年の書庫パンクに登録されているデータが表示されている。

名前：振屋一光

年齢：17歳

性別：男

所属：学園都市第7学区・天壤寺学園高等部（2年生）

職業：高校生

住居：天壤寺学園学生寮301号室

レベル：大能力者レベル⁴

能力：ハッキングパルス
電磁侵犯

備考：現在、自身の都合により天壤寺学園を休学中。

1度目の出会いでは自身を見捨ててその場を去った人物として、2度目の再会では複数の研究所へのハッキングに関しての重要な参考人として。

初春飾利の中での彼の印象は悪いものになっている。

そんな状態で、少女

れていく。

初春節利と青年

振屋一光の物語は紡が

次回

電磁侵犯

ハッキングパルス

第2話・電磁侵犯（ハッキングパルス）1

第7学区・天壌寺学園学生寮301号室。

「うおう・・・この企業、こんな危ないこと考へてんのかよ。マスクにリークすんの決定だな。後ついでにいつものようにあのメモを残してつと。これで終了!」

振屋一光は薄暗い部屋の中、PC画面に表示されている『COMPILE』という文字を満足げに見つめている。

そして椅子から立ち上ると窓際まで行き、カーテンをバッと一気に開き、窓を開け放つ。

「ん~! 一仕事した後に空気を入れ替えると気分が良いな

そんな事を呟きながら空を見上げていると、突然一光の端末が鳴り始めた。

一光はすぐに端末を手に取ると、何をするでもなく目を瞑った。

そのまま少しうると、軽い笑みを浮かべながら瞳を見開いた。

「ほう、シャッジメント風紀委員が俺に気付いたか」

そう呟いた一光は、開け放った窓に身を乗り出すると、そのまま一気に飛び降りた。

「振屋一光がいない？ それは本当ですの？」

現在、ジャッジメント風紀委員第一七七支部では白井黒子と初春飾利は振屋一光の住む学生寮に向かつた風紀委員から振屋一光の不在の連絡を受けた。

「そうですか・・・申し訳ありませんがそのまま振屋一光の搜索をお願いいたします。はい、では」

「どうしましょうか、白井さん？」

端末の通話を切つた白井に問う初春。

白井は少し思案するが、直ぐに初春に指示を出す。

「私も振屋の搜索に出ます。初春は第7学区内の監視カメラで振屋の搜索をお願いいたします」

「分かりました！」

それと同時に、白井は空間移動で支部から出でていき、初春はPCで幾つもの第7学区内の監視カメラを表示、次々に確認していく。

そして、初春はある1つの監視カメラに一光の姿が映っているのを見つける。

「白井さん！ 見つけました！ 第7学区のセブンスミスト4階の監視カメラに映ってました！」

『分かりましたわ。今すぐそちらに向かいます！ 初春はそのまま振屋の姿を監視カメラで追ってくださいー』

「はいーーー」

白井の指示に従い、初春はセブンスミスト内全ての監視カメラを画面全体に表示し、一光の姿を追いかける。

場所は変わり、じゅりゅう第7学区内のとある「アリバース・オリヤ・ボドリーダ」。

「さて、今頃は俺が偽装した監視映像を見た風紀委員^{ピヤシジメン}がセブンスミストに行ってる頃か。まさか本物はこんなところで堂々と飯食つてるとは思わんだろうな」

一光は注文したパエリアを食べながら、自身の端末にパチパチと軽い電撃を放つている。

「とまあ、そんなこと言つても直で見つかつたら終わりなんだがなあ。と言つても、この店は寮からかなり離れてるからなあ。少しの間は大丈夫だろうが、そろそろ出た方が良いか

そう言いながらパエリアを完食した一光は、ふうと息を吐くと、メニューの方に視線を向けると、少し考え込む。

そして

「あ、すみません。チユロス5つください。」

この店での待機を選択した。

そして場所はせきに変わり、こちらはセブンスミスト・3階。

丁度そこに、白井がエスカレーターでやって来た。

「初春、今私はセブンスミストの3階まできました！ 振屋は今何階にいますの？」

『今は5階のエレベーター前の自動販売機で飲み物を買って休んでいるみたいです！』

「分かりました。初春はそのまま彼を見張つていってくださいー！」

白井は端末から聞こえた初春のはー!と言づ返事を聞き、直ぐにエスカレーターを駆け上がり、4階、そして5階へとやって来た。

そのまま客の邪魔にならないよう、小走り程度で移動し、目的の場所へと着く。

「……？ 初春、振屋はビルに行つたんですね？」

しかし、そこには目的の人物は居らず、全くの無人だった。

だが、初春からの返答は白井を混乱させるものだった。

『え？ 何言つてるんですか？ 白井さんの後ろのベンチに座つてるじゃないですかー！？』

「なんですかー？」

そつとわれ、後ろに振り向く白井。

が、そこにほんやはり誰も居なかつた。

「……やはりここにはいませんわ」

『ええ！？ でも、監視カメラの映像ではそこにて、ええ！？』

つ

と、突然端末の向こう側の初春が驚きの声を上げた。

白井はどうしたんだのー？と少し声を荒げながら問い合わせる。

『ふ、振屋一光が・・・セブンスミストの監視カメラ以外にいくつも映つてます！ それも同時に！』

「何ですってー！？」

「

「ふはは、そこに入れば

一光は今、学園都市内を走る巡回バスに乗っており、次の停車は第6学区のアミューズメント施設の前。

「さてと、奴らもそろそろ俺の偽装に気付くだろ? まあ既に別学区に出たから関係無いがな」

一光は腹を擦りながら、外の景色を眺める。

「ぐふう・・・・・流石にチュロス5本は食べ過ぎか」

一光は自身の端末に表示されたMAPを見て、不気味な笑みを浮かべる。

それと同時に表示されていたのは

「

俺の、独壇場だ」

施設すべてのセキュリティ作動時のシミュレー

ト結果だった。

・・・・・次回へ続く

第3話・電磁侵犯（ハッキングパルス）2

「初春、振屋の居所は分かりましたの？」

『すみません！ 監視カメラの映像は振屋の能力でいろんな場所に姿が写っていて判別できません！』

現在、白井は初春に言われた情報通りに行動しているが、どこもかしこも映像に姿はあるが、現場には姿がないと言う状態が続いている。

「所詮は能力で作り出した映像。きっとどこかに綻びがある筈ですわ。初春はそれを何とか見つけ出してください！ 私は聞き込みで彼の行方を捜します！」

『わ、分かりました！』

白井は初春との通信を終え、聞き込みへと向かおうとする。

「あれ？ 黒子じゃない。あんたこんなところで何してんのよ？」

と、そこで突如背後から声を掛けられる。

この声は黒子が最も良く聞くことのある声で、自分の尊敬して止まない人物のものだとすぐに分かった。

「お姉さまーー！」

そう言って飛びつこうとする田井だが、その少女が白井に向け電撃を放ってきた為、できなかつた。

「はあ、あんたも懲りないわね。で、何してんのよ？」

白井は服装を整えながら立ち上がると、少女の問いに答える。

「いたた。風紀委員ジャッジメントの仕事である人を探していますの」

そう言いながら、白井は少女に端末に表示した振屋の顔写真を見せる。

「ふ～ん・・・あれ？　この人だつたらさつとき学園都市巡回バスに乗つてゐるのを見たわよ？」

「や、それは本当ですのー？」

少女は白井の問いに「ええ」と一言だけ答える。

それを聞き、白井はすぐに初春に通信する。

「初春！　聞いていましたわね！」

『はい！　さつきバス会社に連絡を……あつ！　来ました！　運転手の話では第6学区のアミコーズメント施設前で降りたようです…。』

「分かりました！　私はそちらに向かいます！　初春はその後の足取りを追ってください…。」

端末の向こう側から「……」と言つ初春の返事を聞いて、白井はすぐにその場所へと向かう。

「それではお姉さま！　私はこれで…。」

「あー、ちゅうっと黒子…？」

白井は少女に別れを告げ、第6学区へと向かっていく。

「全く、なんだったのよ」

少女は白井が居なくなつた後、そんな事を呟いてから少し考え込むと、うんと頷きその場を後にした。

『ビビリやうやのアリコーズメント施設に入つていつたようです』

「分かりました。初春はそのまま情報を集めていて下せー」

そう言って初春との通信を終える白井は、田の前のアリコーズメント施設に入つていく。

中に入ると、まだ営業中の筈の施設には全く客の気配がなく、もぬけの殻だった。

「誰も・・・いない・・・?」

疑問に思った白井は、警戒しながら足を進めて店内の奥の方へと進んでいく。

周囲にはアリコーズメント施設の為、最新のゲーム機の筐体が所狭しと設置しており、結構死角が多いので、白井はその点にも注意し

ながら進んでいく。

と、そんな時、突如ガチッと言つ音が響いたかと思うと、前方に設置してあるストライクアウトゲームの筐体から、野球ボールが複数高速で発射される。

「 つー？」

白井は咄嗟に空間移動で発射されたボールを回避する。

だが、さらにモグラたたきの筐体からモグラが射出され、白井を襲う。

「 何なんですのーー？」

白井は悪態吐きながらも、もう一度空間移動で避ける。

そこで、端末から初春の声が聞こえてくる。

『白井さん！ 気を付けてください！ その施設の筐体のいくつかには対侵入者用のトラップが仕掛けられています！』

「なるほど、やつ詫び事ですの」

初春の情報を聞き、白井は先程の出来事に納得する。

だがそこで疑問も生まれた。

何故、ジャッジメント風紀委員の自分が侵入者になっているのか。

だが、その疑問もすぐに解ける。

「・・・なるほど、これも振屋の能力と言つ事ですね」

そう理解した直後、右前方の筐体の画面に青年の姿が映し出される。

『『』明察だ、ジャッジメント風紀委員の少女』

「あなた、振屋一光ですわね？」

そう、そこに映し出されたのは白井の追っている人物、振屋一光だつた。

『確かに、俺は振屋一光で合つてゐる。序でに言つと、今巷で噂の電ハッキング・ウェイザード侵魔術師でもある』

「あら、そんなにあつさり認めてしまつてもよろしかったのですか？」

『何、どうせもうやるからバレる頃だろ？』と妄想していたさ

そう言いながら肩を竦める一光。

『さて、ここまで来てもらつたんだ。ちょっとしたゲームをしないか？』

「ゲーム、ですか？」

嘲る様な笑顔を見せながら言い放った一光に、白井は眉をひそめる。

『そつ、ゲームだ。俺はこの施設の最上階に居る。君はそこまで無事に辿り着き、俺の元まで辿り着くことができれば君の勝ちだ。その時は素直に捕まろう』

「それ以外は私の負け、と言つ事でしょうか？」

『ふはは。その辺は君の解釈に任せると。それじゃあゲーム

』

刹那、白井の背後の筐体から2体の警備ロボが飛び出してきた。

『

スタートだ』

「さて、彼女はここまで辿り着くことができるだらうか？」

一光は最上階に設置してあるベンチに寝ころびながら、白井の状況を施設内の監視カメラの映像で逐一チェックしていく。

「おお、流石は空間移動能力者なだけはある。次々にセキュリティを回避して上階に上がってきてるか」

端末には、白井が警備ロボからの攻撃を回避しながら空間移動で上階に移動している姿が表示されていた。

「だがまあ、アレだ。そろそろその厄介な能力を封じさせてもらおうか」

直後、一光は端末に表示された『START』ボタンを押した。

「さて、これで

つ！？」

一光が白井に対策を講じた時、彼の表情が突如驚愕のものに変わる。

「ま、待てよ。なんでこいつがここにいるんだ！」

突如白井の身体に右側から衝撃が走り、左側の壁まで吹っ飛ばされ

「はあ、はあ・・・やつと半分まで来ましたの」

現在、白井は施設の7階にまでやってきていた。

流石の白井も、次々に襲いくるセキュリティーに着実に体力を削られていっている。

そしてこの階も例外は無かつた。

スドオン！！

「つー！ ぐうー！？」

る。

何事かと視線を衝撃のした方へ向けると、相撲取り型の警備ロボが突つ張りをした状態で突つ立っていた。

白井は壁に手を着きながら立ち上がり、警備ロボのさらに後方へ視線を向ける。

そこにはゲームの筐体があり、上にデカデカと『最新腕相撲ゲーム！』と表記されていた。

「くつ、油断しましたの。ですがもう」

当たりませんと言おうとした白井だったが、突然壁に着いていた手に何かを填められた感覚に気付き、そちらを見る。

すると、いつの間にか手首に自身の持っているものと同型のESP錠が填められていた。

「なつ！？ しまつ」

刹那、先程の相撲取り型警備ロボが白井の懷に飛び込み、鳩尾に強烈な突つ張りを撃ち放つ。

「 がはつ！！」

白井は衝撃と共に、クレーンゲームの筐体に叩きつけられる。

同時に、クレーンゲームの筐体のガラスが開き、中のクレーンが白井に巻き付き動きを封じる。

「ぐつー（）」まで、ですのー？」

相撲取り型警備ロボが白井に近付き、止めの一撃を放とうとした。

だが、その一撃は白井に届く前に

「全く……何やうれそうになつてんのよ、黒子！」

少女から放たれた強力な電撃により跡形もなく消された。

一光は、端末の映像に映つてゐる少女　御坂美琴を憎々しげに睨む。

「何でだ！　何であの・・・・超能力者第3位、^{レベル5}『超電磁砲』御坂
美琴がいるんだ！！」

「くそっ！ どうするー？ 今からじや逃げられないかもしねない
し……」

端末の映像を見ながら、一光はその場で考え込む。

「…………仕方ない。あれだけはやりたくなかったんだがな」

一光はどこか諦めたような、吹き切れたような表情で笑い出す。

「ふははー！ もひー、びひーでもなれだー！ いつなつたらなんだって
やつてやるやーー！ わあ、早く！」今まで来い！ 超電磁砲レールガン、御坂美
琴ミクおーー！」

次回 V.S 超電磁砲レールガン

第4話・VS超電磁砲（レールガン）

「ふうん。それで、そいつを倒せばいいのね？」

現在、御坂美琴は白井から今回の件について詳しいことを聞いていた。

「い、いえ、別に倒さずとも捕まえることができれば」

御坂の言葉に白井は訂正するが、彼女はそんな言葉を聞き入れなかつた。

「だつて、どうせ相手は抵抗するんでしょ？　だつたら倒した方が早いじゃない」

「いえ、そうかもしだせんが・・・」

あーだこーだと若干論争気味の2人。

だが、そんな2人の状況は、突如響き渡つた男の声によつて変わる。

「たくよお・・・なんでテメエがここに居んだよ、レールガン超電磁砲」

その声に2人は同時に振り返ると、一光が頭を搔きながら階段を下りてきていたところだった。

「あら、屋上で待っているのではなかつたのですか？」

「ああ？ ああ、そんなんそういうのが来たら意味ねえだろ。そういう自慢の超電磁砲で1発K.O.じゃねえか」

「そうね。じゃああんた、諦めて捕まる気になつたっての？」

御坂の言葉を聞いた振屋は、軽く笑う。

「ふはは、ここまで来てそれは無いってことは分かつてるだろ？ 何、上から逃げるにはここを通る必要があるだけなんだよ。だから

「

刹那、御坂が消飛ばしたものと同タイプの警備ロボが数体飛び出し、襲い掛かった。

「 強引に通りはりますが、お手伝いします。」

振屋の命令で警備ロボが御坂に接近し、突つ張りが御坂に直撃しかける。

「あんた、嘗めてんの？」

だが、突つ張りが届く直前に御坂の放った強力な電撃により、全ての警備ロボが吹っ飛ばされる。

「こんな警備ロボぐらいじゃ、私は止められないわよ」

吹っ飛ばされた警備ロボは全てバチバチと音を立てており、内部から煙も出てきていた。

それを見た一光は、先程見せた様な笑みを浮かべる。

「…………ふはは、そんなわけないだろ？ 僕だってアンタと同系統の能力なんだ。それぐらい分かるつての」

「同系統…………あれ？」

それを聞いた御坂は、一光の顔を見ながら頭に疑問符を浮かべる。

「…………アンタ、どつかであったこと無い？」

それを聞いた一光の表情がさつさまでのくらべらしたものから、からり機嫌の悪い険しいものへと一変した。

「・・・ふは、ふはは、ふははははははー、てめえ、マジで言ひてんならぶち殺すぞ」

一光はやつ言い放つと、今まで握っていた携帯端末を握り潰した。

それにより、一光の掌から床へと赤い血が滴り落ちていく。

「な、なによ？」

「・・・・・・・・・・ふはは、まあ良いや。警備ロボがダメってことは他のセキュリティーもダメだわうじ、こにはイツチヨ俺自身が戦つて退かせるか」

一光は指をポキポキ鳴らしながら、ゆっくり御坂へと近付いていく。それを見て、御坂は白井を階下へ下るための階段のある入口付近まで移動する様に言う。

白井も、今の自分では足手まといになると分かっているため、御坂に従い移動する。

「出来るもんならやつてみなさいーーー。」

白井が移動したのを確認すると、御坂は怒鳴りながら強力な電撃を放つ。

御坂の放った電撃は普通の電撃エレクトロマスター使いでさえ氣絶するほどのもので、一光も直撃すれば一溜りもない程だった。

が、その電撃は一光に直撃することは無かつた。

「そんな電撃、当たんねえよ！」

一光は向かいくる電撃を走って回避する。

だが、その速度が尋常じゃなかつた。

地面を一蹴りしただけで、既に御坂との距離を半分近く縮めていた。

「なつー!？」

「遅えよーー！」

そして、次に地面を蹴る事により、一気に御坂の懷へと入り込んだ一光は、彼女の腹部へと掌底を撃ち込む。

「がつ……」

「つっいやあ……」

勢いよく掌底を振り抜き、御坂を壁まで吹っ飛ばす。

壁に打ち付けられた御坂は、唸りながらゆっくりと立ち上がる。

「ぐつ・・・（ヤバいわね。肋骨が2・3本ヒビ入ってるっぽいわ
ね）」

「まだまだいくぜえ……！」

腹部を抑えながら立ち上がった御坂を見て、一光はさらに殴りかかる。

「つ！ そう簡単にやられないわよ！ ……！」

だが、御坂は咄嗟に電撃を一光へと放つ。

咄嗟に放った一撃だった為、一光も一瞬反応が遅れてしまつ。

「（流石にこれは避けれないでしょー）」

御坂もこの攻撃は直撃すると思っていたのだが、そこでありえないことが起きた。

一光が放たれた電撃全てを一瞬のうちに目視で確認すると、瞬時に身を翻した。

それにより、放たれた電撃は一光に直撃することなく彼の後方の筐体に直撃した。

「つー？ そんな

」

「油断大敵だおらあ……！」

「
がはつ！？」

今の一撃を回避されて驚いた御坂の隙を、一光は見逃さなかつた。

一光は驚いていた御坂の脇に、強烈な回し蹴りを叩き込む。

強烈な蹴りを受けた御坂は、先程同様に壁まで吹っ飛ばされてしまふ。

「かはつ！ ぐう！－！（何なのよ、あの動き－？ テタラメじゃない！－）」

「ふはは、どうしたよ御坂美琴。前戦った時とは立場が逆だなあ－！」

ゆっくりと御坂に近寄る一光の姿を、御坂は何とか立ち上がって見据える。

同時に、一光の今の言葉で、御坂の中にはあつた彼についてのことを思い出す。

「ぐつ！ そう言えば、あんた・・・前に私に挑んできた異能力者、
じゃない」

「ふはは！ 今頃思い出したか。だがちょっと訂正してもらおうか。
今の俺は異能力者じゃない。大能力者だ！！」

「へえ・・・レベル上がったのね」

「ああ、さすがにあんなやられ方したらなあ。だが結局、俺の能力
はこんな応用をしない限り、戦闘では役に立たないんだよ」

それを聞き、御坂は疑問を浮かべる。

「アンタも・・・私と同系統の能力なら、電撃ぐらい放てるでしょ
？ しかもレベルは4なんだし」

「・・・ああ、普通ならそうさ。だが、俺が放てる電撃は相手が
少し痺れるぐらい。それ以上は頑張ってもダメだった！」

一光の言葉を、御坂は黙つて聞き続ける。

「だから俺はそつちに能力を使わず、別のことで何とかできないかと考えた！ 結果がこの、ハッキングに特化した能力さ！！ 俺のレベルは、それによつて設定されてるんだよ！！ 普通に戦つたら強能^{レベル³}力者にも勝てねえよ・・・」

一光は俯き、力強く握る。その掌から、止まりかけていた血が再び滴る。

「だから俺は、どうしたらいいか考えたぞ。どうすればまともに戦えるか。その答えが今の状態だ」

「・・・あんた、一体なにしたつてのよ？」

「ふはは、簡単なことさ。俺の能力を使って運動神経に入り込み、一時的にブーストを掛けてるだけさ。同時に身体のリミッターも外してるので、いつもの数倍の身体能力になつてるはずだ」

それを聞いた御坂は信じられないと言つ表情になる。

「アンタ！ そんなことしたら身体が持たないわよー！」

「そんな事、こっちが一番分かってんだよ！ だけどなあ、あんた

に勝つ為なら俺は・・・何だつてやるんだよおーーー！」

怒鳴ると同時に一光は一気に御坂目掛け駆けだす。

が、直後、一光の右脇に突如衝撃が奔つた。

視線を衝撃のした方へと向けると、警備ロボの腕部が脇に直撃して
いた。

「もう一発…！」

そう声を上げながら、御坂が能力を使用して警備ロボのパーティを一光へ向け勢いよく放つ。

それを見た一光はすぐにバツクステップで回避しようとすると、少し間に合わず右腕に直撃する。

すると、一光の右腕がボキンッ！と音を立ててあらぬ方向へ折れてしまう。

「ガアアアアアアアアアアアツ！－！」

腕が骨折した痛みに、一光はその場に蹲る。

見ると、折れた腕から先がだらんとしていて動く気配がなく、どうやら骨折により腕の腱まで切断してしまったようだ。

「があ、ぐうー！」

「どうする？　まだ続ける気？　見たところ腕の腱も切ったみたいだし、早いとこ病院に行つた方が良いんじゃないの？」

御坂の問いに、一光は痛みに耐えながら立ち上がり、傍に落ちていた警備ロボのパーツを使い、応急のギプスとして使用した。

そして御坂を睨みながら、左拳を強く握る。

「ぐつ・・・まだ、続けるに・・・決まつてんだろおーー！」

一光は左拳を構えながら、御坂へ向かっていく。

それを見た御坂は先程と同じように警備ロボのパーツで攻撃しようとする。

だがその攻撃は、一光の両腕で上手く逸らされてしまう。

「なー？ 何で右腕が！？」

そう、今一光は右腕も使用して御坂の攻撃を避けている。

信じられない光景に御坂は一瞬戸惑うが、直ぐ目の前にまで来た一光に気付き、思考を目の前の事に戻す。

「うあーーー！」

一光が左足でハイキックを放ち、それを御坂はしゃがみこむことで回避する。

「あぶなっーー？」

「もひいっちょおーー！」

が直後、ハイキックが外れた反動を使い、一光は右足で回し蹴りを繰り出す。

御坂は紙一重の所で回し蹴りを避け、同時に周囲に散らばっていた細かい金属部品を一光へ掃射する。

「チイー！」

一光は寸でのところで回避したもの、彼の身体は限界が近いのか悲鳴を上げ始めていた。

「つー？ あんた！ 体が！？」

見ると一光の身体はあちこちから出血しており、さらに腕の肉は数ヶ所裂けていた。

「ふ、ふはは・・・まだまだ。まだ俺はやれる…。」

「アンタ！ そんな状態でやれる訳ないわよー！ それに今も体中が痛いんじゃ！？ それに何で右腕が！？」

「ふは、さつき言つたよな？ 僕は能力で運動神経にブーストを掛けているつて。それと同じで、痛覚神経を遮断してんだよ。だから痛みは感じない。右腕も腱は切れたが、僕の能力で直接神経に働きかければ、動かすことが可能だ」

一光の説明を聞き、御坂はここで一光を止めないと危ないと、そう思った。

「・・・・悪いけど、そんな話を聞いたら何が何でもあんたを止めるわよ」

「ふははー、できるもんならやってみなーー！」

お互^いいに決着をつけるため、その場を駆けだす2人。

一光は自身の身体の限界までブーストを掛けた拳で、御坂は電撃を纏つた拳で、同時に相手に向^け突き出す。

直後、その場を御坂の電撃の輝きで満ち、真白に染め上げていった。

・・・・そして、大能力者^{レベル4}『電磁侵犯^{ハッキングパルス}』振屋一光と、超能力者^{レベル5}『超電磁砲^{レールガン}』御坂美琴の戦いは、幕を閉じた。

次回 病院と天壌寺学園

第5話・病院と天壌寺学園

「……………知らない天井だな」

一光が目を覚まして発した最初の言葉だつた。

一光は上体を起こし、周囲を確認する。

周囲には特に何もなく、あるのは周囲を仕切る黄色基調のカーテンと、自身の腕に付いている点滴ぐらいであつた。

それだけで、ここが病院だといつのを認識するのは容易かつた。

「……………そうか」

そこで一光は思い出す。

あの時、御坂と全力でぶつかり合つたはずの自分が、目を覚ませば病院にいる。

つまり

「俺、負けたんだな」

その事実に気付き、一光は両手を腕で隠すと、微かに涙を流す。

「…………俺、これからどうなるんだろ？」「

暫くして、やつと気持ちも落ち着いてきた一光は、今の自分の状況が不味いと言つことを思つて出す。

分かつてこのだけでも『電子計算機損壊等業務妨害罪』『個人情報保護法違反』『器物損壊罪』等が思い浮かぶ一光。

が、そんな事を考えても仕方ないか、と思つた一光は考えるのをやめる。

「ま、なる様になるか」

そう呟いた時、丁度病室のドアが開く音がある。

少しすると、誰かが一光のベッド付近にまで来ると、仕切っていたカーテンをバツと開く。

「あら、もつ田を覚ましていらっしゃったんですね」

そこに居たのは、初めに一光を捕まえようと施設に入ってきた風紀委員、白井黒子だった。

「…………ああ」

「やつですの。では、貴方のこれから処分を仰っても構いませんの？」

それを聞いた一光は来たかと小さく呟いた。

白井は一光のベッドの脇までやって来ると、そこに置いてある椅子に座る。

「では、まああなたのこれから処遇についてですの」

「ああ、俺はどうなるんだ？」

書類を持つた白井に一光は処遇を聞く。

だが、書類を見ていた白井の表情が微妙なものへとなっていた。

どうしたんだと思った一光だが、白井は諦めたかのように処遇を告げる。

「えっと……今度行われる特別講習の受講ですの」

「…………ん？ 他には？」

「…………ありませんの」

白井の言葉に、一光は珍しく啞然の表情になる。

「いや、無いわけないだる。俺、色々と罪を犯してるだ？」

「ええ、それは重々承知です。ですが、上の決定は先程仰つたものだけですの」

「…………そこから、頭悪いんじやないか？」

「それは言わないでほしですわ」

そつまつと白井は深く溜息を吐く。

と、そこで一光は思い出したことがあった。

「やう言えど、超電磁砲レールガンはどうしたんだ？ 流石に何ともなってことは無いだろ？」

一光に聞かれ、白井はお姉さまなりとの問いかに答える。

「処置を済ませ、今は常盤台の寮へ戻っているはずですわ」

「やうか…………伝言頼んでいいか？」

白井は何ですか?と聞こへ、一光の言葉を聞く。

「すまなかつた、ねえ」

場所は変わり、常盤台中学女子寮。

御坂は白井から聞いた一光の言葉を怪訝な表情で聞いていた。

「何か企んでんじゃないでしょうね？　あいつ」

「それは無いかと。本人もかなり反省しているようでしたわ」

「ふうん・・・まあ良いわ。そう言えば、あいつの学校の方には連絡は入ってんでしょう？　あいつ、どうなるのよ？」

御坂に言われ、白井は複雑な表情になった。

その表情を見てさりげなく疑問になつた御坂は、白井に問い合わせると答えた。

「それが……ちょっとおかしな状況になつてまして」

「おかしな状況、ってなによ?」

「いえ、実は……今回の事件のことを全て学園の教師に連絡したところ

」

「いやいや、おかしいだろ！？」俺が今回何やつてたか知ってるだ

「ああ、そうだ」

現在、一光の病室に天壌寺学園の自身の能力開発担当教師がやってきて、学園での処遇を告げに来ていた。

「は？ 退学しなくていい？」

「…？」

「確かに、お前が何をやったか、全てを聞いた。だが、それなら尚更、お前を退学させるわけがない！」

「いやいやいやいや！？　おかしいだろ！？」

教師の言ひつ意味不明なことに、一光は珍しく困惑する。

「そうでもないだろ。お前は今回、超能力者レベルガントの超電磁砲と戦つたんだろ？」

「そうだけど、それが今何の関係が？」

「聞いた話だと、お前は能力で身体能力のリミッターを解除した上に、さらにブーストを掛けたそつだな」

「………………はい」

「それが危険なことだつてのは分かつてるな？」

「………………はい」

それを聞いた教師は、軽く息を吐くと、真剣な表情で一光を見る。

「なら、その能力の限界を理解しておかないといけないだろ。だが

ら、学園に来てちゃんと限界を測れ。そうすれば、その能力はもつと便利に使えるようになるかも知れないだろ」

「 ッー?」

教師の言葉を聞いて、一光は驚愕した。

犯罪を犯した自身を蔑むことなく、逆に心配してくれてい多のだか
ら。

「だから、な。学園に来い」

教師の言葉に、一光は涙を流しながらはい、と呟いた。

「まさか、退学にしないで復学を進めるなんて、どんな学校よ

」全くですわ

御坂と白井は、一光の病室の前で先程の会話の内容を全て聞いていた。

「聞いた話によりますと、どうやら天壌寺学園は、生徒の能力の開発や研究に特に力を入れているらしいですね。それにより、今まで11人の生徒が低能力者や異能力者から^{レベル1}大能力者へとなつたようです」

彼で12人目だそうですがと白井が付け加えると、御坂はへえと感嘆の声を漏らす。

「まあ、最近ではその能力開発も進展がなく、それで自棄になつて学園を休学していたようですが」

「そう……」

御坂には、彼のその時の気持ちが少なからず分かる。

低能力者から超能力者にまで上り詰めた彼女だからこそ、一光の気持ちが分かるのだ。

「ま、あいつももう大丈夫でしょ。流石にこれ以上悪いことはしないと思うし」

「でしょうね。では帰りましょうか」

御坂はそうねと言つと、2人は病室に入ることなく、帰つていつた。

彼と彼女の出会いの事件が幕を閉じたが、2人の関わりは全く無い。

2人が関わり合つのは、次の事件でのことだった。

これにて、第一章・・・電磁侵犯編　　完

次回、第二章・・・虚空爆破事件編
　　カ一）　　幻想殺し（イマジンブレイ

第5話・病院と天壌寺学園（後書き）

“後書きといつづねの駄弁り場”

てなわけで、第一章終了！　え？　早い？　知ったこっちゃねえ！
(爆)

いや、まあ第一章はプロローグ的な面もあるんで、これぐらいでいいかな。

次回からは『とある科学の超電磁砲』の原作から虚空爆破事件へ入ります。

原作と微妙に変化する部分もありますので、『』了承ください。
では皆様、第一章の拝読、ありがとうございました。

次回第一章もお読みいただければありがたいです。

因みに後書きは、各章の最終話にのみ載せる予定です。

設定・2章開始時（主人公&キャラ・隨時追加&キャラ・微ネタ）

この設定は微妙に変化することがあります。

12 / 18 : 春夏秋冬 回の能力を変更。

設定・2章開始時（主人公&キャラ・隨時追加&・微ネタ）

天壌寺学園

振屋 一光

読み・ふるや かずみち

身長・172cm

体重・68kg

髪型・ほぼ黒だが先端だけ白の短髪。

瞳色・灰色。

容姿・一般的の男子高校生の平均的な体格。

服装・上はチェック柄のものを好んでおり、下は大抵Gパン。

性格：以前とは変わり、多少は友好的になつた・・・と思われる。

所属：学園都市第7学区・天壤寺学園高等部（2年生）

職業：高校生

住居：天壤寺学園学生寮301号室

レベル：大能力者（レベル4）

能力：ハッキングパルス電磁侵犯 能力詳細は第一章の設定へ

春夏秋冬廻

読み：ひとつせ めぐる

身長：176cm

体重：71kg

髪型・薄く赤みがかつた茶髪の天パ。

容姿・顔は微イケメンで、体格は良い方。

服装・大抵が学園の制服。もしくは学園のジャージ。

性格・とても友好的だが、努力しない奴や下心のある奴には嫌悪感を抱く。

所属・学園都市第7学区・天壇寺学園高等部（2年生）ジャッジメント兼風紀委員
第一七七支部

職業・高校生兼風紀委員ジャッジメント

住居・天壇寺学園学生寮302号室

レベル・大能力者レベル⁴

能力・肉体活性アクティブラセル

肉体活性の詳細
アクティブセル

自身の身体の各部のあらゆる能力を一時的に上昇させる能力。
例えば腕の筋肉の筋力を上昇させたり、ケガをした部位の細胞の自然治癒力を高めたりなど、色々と応用の利く能力。

レベル4の廻は、身体の数ヶ所の能力を同時に上昇させることが可能。（例：右腕は筋力をアップし、左腕は骨の硬度を高めるなど）

第6話・幻想殺し（イマジンフレイカー）

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

『・・・限界だな。そこまでだ！』

天壌寺学園、能力開発試験アリーナ。

現在ここで、能力者同士の模擬戦闘が行われていた。

「おおう・・・お前がここまで戦えるとは思わなかつたぞ、振屋」

そう言いながら、模擬戦を行っていた生徒がもう一人の方へと近付き、手を差し出す。

「ふはは、そりゃどうも。けど結局はそつちの勝ちじやねえか。な
あ、四季くんよ」

一光は差し出された手を掴み、立ち上がる。

四季と呼ばれた生徒は、複雑な表情になつていた。

「いや、確かに四季だけどな。正確な名前は春夏秋冬な。春夏秋冬/
巡回

生徒 春夏秋冬 巡は、苦笑しながら一光と肩を組む。

「まあアレだ。お前もだいぶいい顔になつたな」

「そうか？ よくわからんねえけどな」

「何つーか、スッキリしたつて感じの顔になつてんぞ?」

巡回に言われ、一光はあーとの前のことを思ひ出しながら声を漏らす。

「・・・まあ、色々あつたからな」

「ま、良いけどな。俺も良い感じの模擬戦相手ができ嬉しいしな

「いや、俺のこの能力はそう何度も使えるもんじゃないからな?」

「分かつてゐつて。流石に日に何度も頼まないつての

一光はならこいけどと云つと、担当教師の居る場所へと向かつ。

「んじゃ、俺は先生んとこ行つてくるから」

「おう！ 帰りになんか食い行こいつがー。」

「ふはは、良いな！ ジャあまた後でな」

そう言つと、2人はアリーナ入り口で別れた。

少し歩いたところにあるそれぞれのデータ収集室へとやつて来た。

中に入ると、一光の元に直ぐに担当教師がやつて來た。

「振屋！ お前凄いじゃないか！ 最初は数分だけが限界だったのが、今では身体にも耐性が大分付いて20分にまで伸ばしたんだからな！」

「いえ、先生の指導があつたからです」

「何言つてんだ！ お前の努力があればこその結果だ！ お前はもう少し誇つても良いんだぞ！！！」

担当教師に褒められ、少し照れくさくなつたのか視線を逸らしながらありがとうございますと呴いた。

「今日はもう疲れただろ？ 帰つて休んでいいぞ」

「はい、ありがとうございます！」

一光は一礼すると、部屋を出て昇降口へと向かう。

お互に云いたいことを言つてみると、同時に表情が固まる。

「ふはは、何を云つてますやう。あそこ以外に良い店なんてある訳がない」

「お前、何時もやつだろ？ たまには別の店にも行ひやがせー。」

「俺は断然、オリヤ・ポドリーダだな」

「俺的にあそこが良いと思つんだよ、第15学区に最近できたフランス料理のフアミレス！」

廻と一光は道を歩きながら、これからどこに行へかを話している。

「ん~！ んでさ、どひに行へよ~。」

「・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「「やんのか」「フーーー！」」

それから数分、2人は言いたいことを言い合い、結果・・・・・

「ふはは、Winーー！」

「くそ、口喧嘩じや勝てる自信がねえ・・・・・」

結局、一光の何時も良くファミレス オリヤ・ポドリーダに決定した。

「てなわけでレッツゴー・・・・・と行きたいが、その前に金下ろしてくるわ」

「リョーカイ、そここのコンビニで下してこー

一光は分かったと言つと、言われたコンビニへと入つていいく。

直後、ATMコーナーから不幸だーーと悲痛な叫びが響いてくる。

見ると、そこでは一光とそう歳も変わらない青年が、ATMの画面に表示されたキャンセルボタンを連打していた。

「くそう！ カードが出てこねえ！！ これはホントに不幸だあ！」

「…………あの、ちょっと良いつすか」

一光が声を掛けると、青年が振り向く。

青年は涙目になつており、その顔は本当に幸薄そうな顔だった。

「大きなお世話だ！！」

地の文に突っ込まないでください。

「？？ どうかしたんですか？」

「あ、いや、えっと・・・カードが飲み込まれてしまつて」

一光はふくんと言いながらATMへと近付き、軽く触れる。

直後、ATMの画面にノイズが奔り、同時に飲み込まれていたカードが排出される。

「あ、おおおおおおおー！ カードが出たあーー！」

「ほい、これでいいか？」

「いや、ホントありがとついでこまくー！」

青年は一光に礼を告げると、直ぐにコンビニを出て行った。
一光は何だつたんだらうと思ひながらも、ATMからお金を取り出して外で待っている廻の元へと向かつ。

「しかしアレだな。」
「うしてお前と帰るのもなんだかんだで久しづ
りじゃねえか？」

食事を終えた一光と廻は、寮へ戻るために河川敷沿いの道を歩いて
いる。

「当たり前だ、バカ」

「ふはははは・・・・・チユロスフ本は食い過ぎだらうか?」

「ふはは、そう言えばそうだな。俺が休学する前さりだから、大体3か月ぶりか?」

「あ～、そう言えばお前、あの時ネガティブってたもんな」

「…………言つた、思い出したくない」

一光ははあと溜息を吐きながら、河川敷を眺めている。

と、少し離れた位置で何かがバチッと輝くのが目に入った。

「おい、今の見たか?」

「おう。行つてみるか?」

一光が頷くと、2人は輝きが見えた場所まで走り出す。

少しすると、目的の場所へ辿り着く2人。

そこで2人が見たのは、超能力者の第3位、『超電磁砲』^{レベル5}御坂美琴が誰かと戦っているところだった。

すると、一光は御坂と戦っている相手を見て、驚いた。

「あり? あいつ、さつきコンビニにいた奴?」

「コンビニ？　ああ、お前が言つてたカードが飲み込まれてたって奴か」

2人は離れた位置から御坂と青年の戦いを眺めている。

そんな中、2人は可笑しなことに気付く。

「なあ、さつきからあいつが右手で防ぐと、能力が消されてないか？」

「ああ、俺もそんな感じがする。電撃に対して耐性でもあるんだろうか？　どう思うよ」

廻の問いに、一光は首を横に振る。

「いや、それだとさつきの砂鉄の攻撃を防いだ理由が分からぬ。何か根本的に、能力自体を打ち消してるような」

そう言つていると、御坂が青年の手を握り、直接電撃を流そうとしていた。

「流石にこれは終わつたか？」

「だらうなあ・・・・・って、あり?」

だが、手を握つてから御坂が能力を発動する気配がない。

それどころか、青年が拳を振り上げるとビクッと身体を震わせた。

「じつこいつ事だよ・・・・あれ・・・・」

「ふはは、面白いな。もしかしてあの右手に触れてると、能力自体発動できなくなるのか?」

怯えた御坂を見かねた青年が、ゆりゅうじとその場に倒れ込み、棒読みでマ、マイリマシターと言つた。

一瞬、呆気に取られていた御坂だつたが、直ぐに怒りで電撃を放つと、それに驚いて逃げ出した青年を追い始めた。

「・・・・・何だつたんだらうな?」

「さあな。だけど、あの能力についてちょっとした話は聞いたことはある」

都市伝説程度だけだと付け加える一光に、廻はどんな能力なんだと問う。

「どんな能力でも、触ることで打ち消す能力。それが俺の聞いた話の能力だ。確か名前は・・・『^{イメージブレイカー}幻想殺し』だつたか？」

「どんな能力でも、か・・・本当にいたら、てか実際に見たか、今」

「まあ、あれがそつだと決まつた訳じゃないけどな」

「だなあ。そろそろ帰るか」

廻に言われ、一光は時間を確認すると既に結構時間が経っていたことに気がつく。

2人はすぐにその場を駆け出し、学生寮へと戻つていった。

次回　　虚空爆破事件・始まり

^{グラントン}

第7話・虚空爆破（グラセント）事件・始まり

「虚空爆破事件……つてああ、最近話題になつてる事件か」

天壌寺学園2・A教室内で、一光は昼食を取りながら、廻と今話題の虚空爆破事件について話していた。

「そそ。ここの前寄つたコンビニあるだろ？ ここで事件があつたみたいなんだよ」

「あー、あそこか。だけどそれがどうした……つてああ、そつか。そう言えばお前、ジャッジメント風紀委員だつけ」

「おま、忘れんなよ」

廻は購買で買った菓子パンの袋を開け、食べ始める。

「そんじよ、どうも犯人の狙いが分からんわけよ。んで、お前の知恵を貸してくれ」

そつ言いながら廻は、その事件の資料を渡してきた。

一光ははあ、と溜息を吐きながら、決定していくであひつ返答を用い浮かべながら、廻に質問する。

「拒否権は？」

「無こに決まつてんだろ」

「ですよね～・・・・・はあ、無こわあ

「…………これは偶然……じゃないわな。だが、まだ確信がな
い。

資料を捲っていた一光は、あるページを見て手を止める。

「ん~、能力はアルミを基点に重力子を爆発的に加速させることで爆発させるのか。だが書庫パンクに登録されている該当の能力者は1人だけ、そいつにはアリバイがあると。分かつてることは、ぬいぐるみにアルミを仕込んでいるってことぐらいか。別に決まった場所に仕掛けてるわけじゃないしなあ……ん？ これって……」

その道すがら、廻に渡された資料を確認している。

放課後、一光は1人で寮へと戻つていた。

次に事件が発生した時にも同じような結果だった場合、この予測で
決定か

呟きながら一光は資料を閉じる。

空を見上げ、だけどと言しながら資料の表紙を撫でる。

「俺の予測は、当たらない方が良い」

一光は資料を鞄に仕舞うと、寮への帰路へ着く。

場所は変わり、こちらはあるスーパー・マーケット。

ここには今、客や店員は一人もおらず、ジャッジメント風紀委員である春夏秋冬ヒトドクセ1人だけだった。

「 」のりん、 」の辺でいいのか？」

『ええ、その辺よ。あとこのりんはやめて』

「 分かりました、みいにゃん」

『戻ってきたら殴るわよ』

「すいませんでした」

彼の所属している風紀委員ジャッジメント第一七七支部は、このスーパーで重力子の爆発的加速を観測した為、客や店員を全員避難させ終わつたところだ。

現在は爆発物と思わしきも危険物を探していた。

「しかし、どこにも見当たらないつすよ。もう誰かが処分したんじゃないですか？」

『それは無いわ。今も店内で重力子の加速が観測されてる。時間的にもうすぐだから、気を付けるのよ』

「大丈夫だつて。みいにゃんも知つてゐしょ？ 僕の『肉体活性アクティブセル』の能力」

『知つてゐからこそよ。全く・・・・あ、あとみいにゃんはやめてつて言つてるでしょ。殴るわよ』

「はいはい、分っかり

』

刹那、店内に轟音が響き渡り、

廻諸共店内を爆風が襲い、真紅の炎が飲み込んでいく。

『ちょっとー？ 廻、大丈夫なのー？』

店内に微かに聞こえてくる人の声。

先程まで、廻と通信していた女性 固法美偉が、廻の安否を確認する為に端末の向こうから叫んでいた声だった。

「痛うー。大丈夫って言つたろ？ 我の能力『肉体活性^{アクティブセル}』で全身の皮膚の熱に対する耐性を上昇したからな。ダメージは爆風で吹っ飛ばされたのと少しの火傷ぐらいだ」

固法は廻からの返答にホッとする。

だが直後、2人の予想だにしなかつた事態が起きた。

ブン！

『ー？』

固法の方はパソコンで新たな重力子の爆発的加速を観測し、廻の方は目の前に落ちていたぬいぐるみの複数が同時に拉げていくを見

て、不味いと思った。

『廻！ 今すぐそこを

』

「分かつてゐつての！－！」

固法に言われるよりも先に、廻はその場を駆け出して店外へと向かう。

だが、それよりも先に拉げたぬいぐるみたちが爆発し、廻を容赦なく襲つた。

一光がそのことを聞いたのは、翌日登校してきて担当教師に偶然会つた時だった。

「廻が重体！ー？」

「ああ、どうやら最近よくニュースなんかでやっている連續虚空爆破事件の現場で、爆発に巻き込まれたらしい」

それを聞いた一光は、自身の予想が当たつていたことを確信する。同時に、何故外れてくれなかつたのかと言ひ罪悪感にも似た感情を抱いた。

「昨日運び込まれてからはずつと手術中で、今朝方処置を終えたそ
うだ」

「そりですか・・・教えていただき、ありがとうございました」

教師は気にするなと一言告げると、教員室へと向かつて歩き出る。

一光はそれを見届けると、自身の教室へと向かつて歩き出す。
そして、彼はあることを決意する。

「犯人はぜつてえふつ飛ばす！！」

そう決意した一光は、教室の自身の席へと座ると、カバンからノートPCを取り出し、あるプログラムを作り始めた。

次回

虚空爆破事件・観測
グラビトン

第8話・虚空爆破（グラヒン）事件・観測

「俺の技術じゃこれまでが限界か」

一光は自身のノートパソコンに表示されたたつた今組んだばかりのあるプログラムを見ながら呟く。

画面にはPCを中心とした半径1km以内の地図が表示されている。

「あとは、この範囲内で重力子の急激な加速が起これば、観測できるはずだ」

一光はノートPCを閉じ、時間を確認する。

現在の時間は午前8時21分。

もつすぐSHRが始まる時間だ。

「・・・・犯人捜すのは放課後だな」

時は過ぎ、放課後。

一光は現在、第7学区内を歩きながら、重力子の爆発的加速を観測するのを待っている。

「ん~、この辺には居ないみたいだな。次の場所に行くか」

一光は周囲の学生たちに目を配ると、彼らの右二の腕を確認してある物を付けているかを確認する。

この場の周囲に付けている人物はいないため、一光はその場から動き出す。

「ん~、次はどこに

行こうかと言おうとした一光だが、不意に後ろから服を引っ張られる。

振り向くと、そこには小学生くらいの少女が一光の服を摘まんで立っていた。

「えりと・・・どりした?..」

「あ、あの・・・およいふく買いたいの」

「あ~・・・エリに行けばいいが分からぬのか?」

一光の言葉に、少女は「へつと頷く。

はあ、と溜息を吐きながら、一光は少女の田線と回じ幅をまだしゃがみ込む。

「分かった。兄ちゃんが連れてつてやるよ」

そつ告げながら、一光は少女の頭を優しく撫でる。

少女はあつがいと照れながらくちゅうに囁く。

「それじゃあ行くか!」

少女は元気よくうなーと返事をすると、一光に手を引かれながらついて行く。

セブンスミスト前までやつて来た一光と少女。

しかしその直後、一光のPCが鳴り出す。

「つー？ まさかこの近くでー！？」

「どうかしたの？」

一光と一緒に居る少女が尋ねてくる。

どうしたものかと考える一光だが、そこに誰かが声を掛けてきた。

「あの、どうかしたんですね？」

一光は声のした方に視線を向けると、先日コンビニード出会った青年が立っていた。

「あれ？ あんたこの間の・・・」

「ああ、カードが飲まれてた奴か。俺は振屋一光、どうかしたか？」

「俺は上条当麻。いや、振屋さんが何か困ってるみたいだったから、気になって」

「あ～、俺のことは一光でいい・・・実はな」

一光は少女と出会つてからの事を説明する。

それを聞いた当麻は、だつたら自分が連れて行くと言つ出した。

「ん～、そつちが良いつて言つなら頼むよ

「おひ、任せとけー それじゃあ行くか」

少女は「ぐんと頷くと、一光の方を向きバイバイと言いながら手を振る。

それに応えるように一光は少女に向け手を振ると、少女は満足そうな笑顔を一光に向け、当麻について行く。

2人の姿が見えなくなると、一光はすぐさまPCを開き確認する。

画面に表示された地図上に、1箇所だけ赤い点が表示されていた。

そして、その赤い点が表示されている箇所を確認して、驚く。

「つーー セブンスマスト内かよー？」

だが、現在観測されているのはまだ微弱で、通常の衛星では観測されるほどのものではない。

だから、今現在この場で爆破が起こるかも知れないと知っているのは一光だけだ。

「チツ！ 今はこの中にいるかも知れない風紀委員を探すか！」

一光の推測、それはこの事件で狙われているのが風紀委員の人間ではないかと言う事だ。

廻からもった資料に目を通した時、一光は全ての件で風紀委員が必ず怪我を負つていてことに気付いた。

しかし、それが本当かどうかは分からぬ為、次に事件が発生するのを待ち、そして廻が被害に遭つた。

一光は廻に自身の推測を教えていればと後悔したと同時に、自身の推測が当たつていたと確信した。

今日、一光は第7学区中を歩き回り、風紀委員の人間を見つけると30分程見張つて、何事もなければ別の人を探しては見張るということを何度も繰り返していた。

そして今、偶然にも重力子の爆発的加速の予兆と言えるものを一光は観測した。

少しすると、ジャッジメント風紀委員でも観測できるほどのものになるだろう。

「へー！ 1階ずつ風漬しに行くしかないか！」

一光は悪態付きながらも、その場を駆けだした。

次回

虚空爆破事件・再会と爆破
グラビットン

第9話・虚空爆破（グラヒトン）事件・再会と爆破

「二階もないか……そろそろ時間的に不味いんだが」

一光はＰＣのディスプレイに表示された時間と現在の重力子の状況を確認して焦る。

二階まで見てきた階には、
ジャッジメント
風紀委員らしき人物はいなかつた。

「早く探さないと」

そう言いながら、上階へと向かおうとした時だつた。

突如、店内放送がセブンスミスト全体に響き渡る。

『誠に申し訳ありません。現在電気系統のトラブルが発生しました
為、お客様は一時的店外へ退店していただきますようお願いします』

「……このタイミングで電気トラブル……まさか……」

一光がPC画面に視線を戻すと、先程とは比べ物にならないほどの重力子の爆発的加速を観測していた。

直後、周囲の客たちがゆっくりだが一斉に出口へと向かい、歩き始めた。

一光は他の客にばれないように、こっそりと人の少ない場所へと移動する。

そして、周囲を見渡してネット接続用のモジュラージャックを見つけると、そこへ近付いて能力を発動する。

「まずはセブンスマートの内部構造のデータを抽出。その後、内部構造データを観測プログラムに組み込み、より詳細な重力子の加速観測箇所の割り出しだな」

咳きながら、一光は観測プログラムにセブンスマートの内部構造データを目にも止まらぬ速さで打ち込んでいく。

「…………よし、内部構造データの組み込み完了。次は詳細な観測地点の割り出し」

一光がプログラムに色々と打ち込み、最後にEnterを押す。

すると、画面にセブンスマイルのCG画像が表示され、ある一点だけが光っていた。

「つー？ 丁度この上かよーー。」

それを確認した直後、一光はパソコンを鞄に仕舞い、その場を駆けだしていた。

「・・・・まさか、誰かが持っているのか！？」

重力子の加速を観測している光点が、少しずつではあるがゆっくりと動いていた。

「おーおー・・・観測箇所が動いてるだと？」

と、そこであることに気が付く。

上階へやつて来た一光は、直ぐにパソコンを取り出して観測箇所を確認する。

一光はパソコンを持ったまま、観測箇所へと駆けだす。

そして、観測箇所付近へと差し掛かつた時、彼女たちは居た。

「ん？ ああ！！ あなたは！！」

「ちょっとあんた、こんなところで何してんのよ？」

「一光か！」

そこに居たのは、一光が以前助けた？少女 初春飾利と、常盤台中学の『超電磁砲』こと御坂美琴。

そしてセブンスミストに入る前に名乗り合つた青年 上条当麻だつた。

「お前ら、どうしてここに？」

「それは「こいつのセリフです！ どうして貴方がここに居るんですか！！」えっと、初春さん？ 私のセリフを取らないで・・・つて、聞いてないか」

初春はこの間の事もあり、一光のことあまりよく思っていない為、結構きつく当たる。

その様子を見た御坂は、そんな彼女を見て苦笑を浮かべていた。

「いや、ちょっとな。それより当麻、あの子はどうした？」

「もうだつた！　あの子がまだ出てきてないから探してたんだ！　一体どこでー？」

当麻が慌てて探しに行こうとした時だった。

一光にガニガニと文句を言っていた初春のケータイに着信が入る。

直ぐに初春は電話に出るのを見た一光は、そこでやつと彼女の右二の腕に付けられている腕章に気付く。

「なつ……（まさか今回のターゲットはこいつか！？）」

直後、初春の背後から一光がセブンスミストまで連れてきて、当麻が店内を案内した少女がカエルの様なぬいぐるみを持って走ってきた。

「おねーちゃん。メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたくしてつて」

少女に声を掛けられた初春は、少女の方へと振り返る。

少女の姿を見た上条はホッと胸を撫で下ろすが、御坂の顔はなぜか浮かない表情だった。

すると刹那、少女の持っていたぬいぐるみに異変が起きる。

ぬいぐるみの中心部に黒い球状の歪みが生じ、少しづつぬいぐるみを飲み込んでいった。

「ツーーー？」

それに気付いた初春は、瞬時に少女を庇つように抱きかかると、その場にしゃがみ込む。

「逃げてくださいーー！　あのが爆弾ですーーー！」

ぬいぐるみはどうぶん球状の歪みへと飲み込まれ、段々と歪な形になつてこぐ。

「（レールガンで爆弾）と吹き飛ばすツーーー！」

「（へへ、俺の距離からじゃ聞こ合ひわなーーー）」

御坂はそれを見て、レールガンを放とうとポケットからコインを取り出そうとする。

だが、そこで御坂はコインを取りこぼし、床へ落としてしまつ。

「（マズった……）」

そして一光は、距離が意外と離れていた為に、無事に助けるのが困難だと理解する。

「（クソ！ ビツすれば……）」

そんな2人の事をあざ笑つかのよつて、球状の歪みは吸収する速度を急激に上げると、一気に収束する。

「（間に合わ）」

そして・・・その場のすべてを爆発が飲み込んでいった。

次回

虚空爆破事件・偽解決
グラビットン

第10話・虚空爆破（グラビン）事件・偽解決

「犯人、捕まつたってな」

「みたいだな」

あの爆発に巻き込まれそうになつてから、一晩が過ぎた。

あの後、一光は爆発から逃れることができ、ジャッジメント風紀委員やアンチスキル警備員に見つかる前に現場を去つた為、犯人が捕まつたと知つたのは朝のニュースサイトの記事でだった。

そして現在、意識が回復し、怪我もほとんど完治しかけている廻に詳細を聞いているところだ。

「どうやら犯人のレベルは書庫パンクでは異能力者らしい」

「異能力者うー!? どう見てもあれは大能力者はあるつて…」

「だよなあ・・・・だから今回、犯人を特定できなかつたわけだよ
な」

廻はベッドに上体だけ起こし、デッド備え付けのテーブルで今回の事件の報告書のコピーを確認しながら呟く。

「・・・・それにしても、お前回復早いよな。本当なら後1ヶ月程は入院しないといけないのに」

「まあ、俺の能力様様だな」

そう言いながら、廻は自身の指先に黄色い炎を灯す。

「肉体活性か。アクティブセル細胞の自然治癒力を高めたってところか」

「気が付いてからずっと使つてたからな。けど、ずっと演算しつばなしは疲れるわ」

「そりが・・・ま、今はゆっくり休んでおけよ

「・・・・・だな」

2人はどちらからともなく笑う。

その時、病室のドアが開き、誰かが入ってくる。

「あ、春ひととせ夏ひととせ秋ひととせ冬ひととせ先輩。お見舞い」

入ってきた少女は、部屋の中に居る一光の姿を見た瞬間、持つていてお見舞いの品と思わしきフルーツ盛り合せを床に落とし、固まる。

その音を聞き、初めて少女の存在に気付いた一光は少女の顔を見て同様に固まつた。

「「どう・・・どうしてお前（あなた）がここに！？」」

そこには、事件の現場でも出くわした少女 初春飾利が立つた状態で固まっていた。

「初春、どうしたんですの？」

「初春さん？」

「ちょっと、早く入つてよ初春！」

さうに初春の背後から、3人分の少女の声が聞こえてくる。

一光はその内の二つの声を聞き、ヤバいといふ表情になった。

そんな一光の気持ちも知らない彼女たちは、次々に病室へ入つくる。

「ああ！　あなたは振屋一光！－

「何であんたがここにいんのよ？」

「え？　誰ですか？」

病室に入ってきた少女達　白井黒子、御坂美琴、そして黒髪長髪の少女　佐天涙子は三者三様の反応をする。

「ふはは・・・・面倒だ」

この状況をどうするか考えるだけで面倒臭くなり、溜息を吐く一光
だった。

「まさか、こいつが春夏秋冬先輩と知り合いだつたなんて」

「知りませんでしたわ」

あの後、佐天には自己紹介を、他の3人には何故一光がここに居るのかを、説明した。

「しつかし、白井と初春だけなら分かるが、御坂と佐天も来るとは思わなかつた」

「いや、まあいつもお世話になつてゐるしね」

「やうですよー！」

「そう言ひながら果物に手を伸ばさないでください、佐天さん」

フルーツに伸ばしていた手をパシッと叩かれる佐天。

「うう、酷いなあ初春」

叩かれた手を擦りながら、ゆっくりと初春の後ろへと回り込むと、

スカートを

「それでは皆さんお待ちかねの

」

「お前は何しようとしてんだ」

捲りたが、その前に一光に頭を叩かれ阻止される。

「アイタツ！ うう・・・初対面の人阻止されるとは

「全く、何やつてんだか」

「ええ～、良いじゃないですか。合法的にスカートの中が見れるんですよ？」

「合法的じゃありません！！」

ぶーたれる佐天に怒鳴る初春。

そんな2人を見て、一光は苦笑を浮かべた。

「それにしても良かつたわね。これで事件も解決したし

「ですわね」

「 せつ言えば、犯人の様子はどうだ？」

廻の言葉に、白井は端末のモニターを開き、調書を確認する。

「ええっと・・・今のところは素直に犯行を認めていますわ」

「 そうか。なら安心だな」

「 事件も終わったんだ。今は少しでも身体を休めてろ、四季」

一光に四季と言われ、廻はいやだからとその呼び名を否定しようとすると、

そのやり取りを聞き、4人は疑問符を浮かべる。

それに気付いた廻が、不本意ながら一言だけ告げる。

「いや、俺の苗字で気付けよ」

その言葉を聞き、4人はああ！と納得した。

「あ、そろそろ面会時間終了するな」

一光が自身のケータイを確認しながら呟く。

「あ、ホントだ」

「それでは、わたくし達も帰りましょうか」

「そうですね」

「それじゃあ失礼しました！」

4人は2人に別れを告げると、病室から出て行つた。

「んじゃ、俺も帰るか。ちゃんと身体休めろよ？」

「分かつてゐつて。何度も言わなくていいつての」

「ふはは、そうかい。それじゃなー！」

一光も、廻に休むよつとつてから病室を後にする。

これで、虚空爆破事件は幕を閉じた。
虚空爆破事件 グラビティン

そう、幕を閉じたかに見えた、が・・・・・

「くそ！ くそがあ！！」

学園都市にあるとある路地裏。

そこで、1人の青年が壁に拳を打ち付けていた。

「くそつ！！ 介旅が失敗した時に後始末として消してたのに、あいつが居なくなつたら俺の犯行がカモフラージュ出来ねえじゃねえか！！」

そんな青年の背後から、数人のスキルアウトが襲い掛かつてくる。

青年はポケットから1円玉を数枚取り出すと、スキルアウト目掛け放る。

刹那、1円玉が一気に爆発し、スキルアウト達を吹っ飛ばす。

「・・・・仕方ねえか。ここからは、俺が続けてやるよ・・・・ ジ
ヤツジメント
紀委員狩りをなあ！！！」

青年は誰にでもなく宣言すると、その場から去っていく。

次回

虚空爆破事件・終わらぬ爆発

第1-1話・虚空爆破（グラビアン）事件・終わりぬ爆発

虚空爆破事件の容疑者の少年が捕まってから、6日が過ぎた。

ジャッジメント
風紀委員第一七七支部では、虚空爆破事件の後処理（報告書整理や調書の確認など）を行っており、まだ多少の忙しさがある。

支部内のPC2台は初春と白井の2人がデータ化した書類の確認と整理を行っており、テーブルでは廻が調書を並べて内容の確認をしている。

そして、ここにいるとおかしい人物が一人、廻の手伝いをしていた。

「おー四季、どうして俺は手伝わされてんだよ？」

部屋の端で文句を漏らしながら書類の整理をしている一光が、廻に問う。

「どうせ暇だらっ？」

「いや、まあ暇だがなあ・・・」

じゃあ手伝えと言い、自身の作業に戻る廻。

それを見て、溜息を吐きながら諦めて元の作業を続ける一光。

現在、一光は廻に支部へと連れてこられ（強制的に）書類整理を手伝わされていた。

最初は逃げようとしていた一光だが、その度に廻の能力で阻止されてしまつた為、もう諦めている。

「はあ・・・・・・面倒だ」

「無駄口を叩いてないで、早く書類整理を終わらせてくれださいよ」

初春はPCで作業を続けながら一光に注意する。

一光ははいはいと半ば投げやりな態度を取りながら作業を黙々と続けていく。

それから暫くが経ち、時計の短針が4時を過ぎ、長針が30分を指したと同時に、全員の作業が終了した。

「終わったあ～」

「終わりましたわ・・・」

「終わつたあ！――」

「お・・・・終わつた・・・・」

全員が机に突っ伏して身体を休めようとした時、固法が4人の元にやってきて、テーブルの上に何かを置いた。

「みんなお疲れ様。これ、今日買つてきたケーキなんだけど、私は食べたから4人で食べて」

そう言われて視線を向けた先には、皿の上に乗せられた4種類のケーキが美味しそうな匂いを醸していた。

「美味しそうだな」

「ですわね。ですが・・・どれを頂きましょつか？」

皿の上に載っているのは、ショートケーキ、モンブラン、ザッハトルテ、フルーツタルトの4種類。

誰がどれを選ぶかによつては被る可能性がある。

そつ

「俺（私）、ショートケーキがいい（です）……」

こんな風に。

人によつては、この状況で言い争つたり、ジャンケンをしてどちらが食べるか決めたり、互いに譲り合つたりするだろ？

だが、この場ではそのようなことが起きなかつた。

「……じゃあやつぱ俺、モンブランでいいや

一光はショートケーキに伸ばしかけていた手をモンブランくと伸ばし、自身の目に乗せ手前に持つてくる。

「え？　えっと・・・良いんですか？」

一光がここまで簡単に諦めるとは思っていなかつたのか、初春はキヨトンとした表情で一光に聞く。

「ふはは、流石に年上だからな。いつの年下に譲れつて親に言われてんだよ」

それに妹もいるしなと最後に付け加えると、一光はモンブランのクリをフォークで掬い上げると、一口でパクリと口に入れる。

初春は一光の言葉を聞き、少し考え込む。

が、その後すぐに一光の言葉に甘えてショートケーキを自身の皿に乗せる。

そのやり取りを見て、臼井と廻は軽い微笑を浮かべながら、残ったケーキを取り、2人と同様に食べ始める。

直後、部屋の中にピーッー・ピーッーとなるで警告音のような音が響き渡る。

「ぶつ！　なんですかー？」

「これ、警告音か何かか？」

白井と廻、初春が周囲を見渡す中、一光はこの音の発生源が何なのかに気がつく。

「ああ悪い、俺のノーパソだ」

それと同時に、3人がズコッとズッコケそうになる。

3人は全く・・・や傍迷惑ですわなどと口々に漏らす。

そんな3人の文句を無視して、一光は自身のPCを開き、今のアラームの原因を調べようとする。

だが、その原因はすぐに分かり、同時に信じられないと言つ表情になる。

「・・・なあ、廻。一つ聞いていいか?」

「あん? 何だ?」

PCの画面に視線を向けたまま、一光が廻に問う。

「二の間の虚空爆破事件の犯人・・・釈放されたとか無いよな?」
〔グラビアント〕

「それはねえって。流石にあんないとまでもやつてたんだからな」

一光はだよなあと呟きを漏らしながら、ずっとPCの画面を見つめている。

が、暫くすると誤作動か?などと呟きながらPCを閉じ、3人が座っているテーブルの所へと戻る。

「何だつたんだ?」

「いや、プログラムの誤作動だと思つ。もう使ひこともないプログラムだつたからな」

廻はそつとだけ言つと、またケーキを食べ始める。

一光は何故あのプログラムが作動したのかと考えながら、モンブランを食べ始める。

そんな彼のPCには、こんな表示が出ていた。

重力子観測プログラム

観測原因・重力子の爆発的加速を確認。

観測箇所・風紀委員第一一二三支部内。
ジャッジメント

場所は変わり、ジャッジメント風紀委員第一一二二支部。

現在、この場所はとても田を当たられる惨状ではない。

「ぐ・・があ・・・・・！」

室内はどこも黒焦げで、机やドアはどれも拉げていた。

そして部屋の壁付近には、数人の風紀委員ジャッジメントが酷いケガをして倒れていた。

その誰もが服は焼け焦げ、肌には大小差はある火傷を負っている。

「あゝあ・・・・・スッゲエスカッとしたぜ！」

そんな中、唯一人だけ無傷な青年が、ジャッジメント風紀委員の一人を踏みつけながら不気味な笑みを浮かべる。

「しつかし、ここまで派手にやつちまつたらすぐに他の奴らが駆けつけるか。どうすつかなあ？」

青年が指を顎に当てて考えていると、そこに少女が一人、突然姿を現した。

「うふこりゅいじゅいじゅい！ あんた向やつてんのぞー。」

「ああ？ なんだよ、干城^{かずさね} 見て分かるだろ？ 爆破だよ」

青年の言葉を聞いた少女は、深い深い溜息を吐きながら青年に詰め寄る。

「あんたねえ！ 私らの目的は確かにここにいたナビ…… こんなに派手にやつていいわけないでしょ！？」

「気^きにすんな！ 僕は気^きにしない！」

「殴^うつていい！？ 殴^うつていいかな、私！？」

拳を握りながら少女は青年をこれでもかとまづまづ睨み付ける。

が、そんな少女のことなど気にせず、青年は踏みつけ^{（ジャッジメ）}ていた風紀委員^{（ジャッジメ）}を蹴飛ばす。

「わいと、やんじゅあ行ひゆゑ、干城」

「・・・はあ、もうここわ。それじゃ、早くアジトに歸るわよ、干城」

「それにしても、漢字だけ見ると紛らわしこよな。俺とお前の苗字

つて

「それ今言つ事かな？ それに名前の方は読みが同じだから、そつちの方が紛らわしくない？」

「あ～、それもあるよなあ」

そんな他愛のない話をしながら、青年
城 静稀はその場から姿を消した。

千城 鎮樹と少女

千

次回

虚空爆破事件・少年少女（虚げられる者）
（クラックトーン）

第1-2話・虚空爆破（ケラヒーン）事件・少年少女（虚けいざる者）（前書き）

春夏秋冬、廻の能力を変更しましたので、その辺を修正しました
のでぬかしきないか確認してもいいると助かります。

第1-2話・虚空爆破（グラビーン）事件・少年少女（虚げらる者）

「……そうですか、それでは」

ジャッジメント
風紀委員第一七七支部では、白井が他の支部の風紀委員からの連絡
の対応をしていた。

その連絡の内容と書つのは……

「やはりまた、ですか？」

「ええ、
ジャッジメント
風紀委員支部連続爆破事件の続報ですわ。どうやら犯人は
介旅初矢と同様の能力を有している様ですの」

ジャッジメント
風紀委員の支部が幾つも爆破され、何人もの重傷者を出している事
件のことだった。

「と言つことは、
シンクロトロン
量子変速ですか？」

「そうですの。実際に、爆発の起きる前には重力子の爆発的加速が観測されている様ですの」

白井は送られてきた事件の関係資料のデータを、初春の私用しているPCへと送信する。

初春はすぐに資料データを開き、確認する。

そして、被害にあった人数を見て、驚きの声を上げる。

「被害数・・・18人！？」

「そう、事件数は3件と少ないのに、その被害人数は既に20人近くになつてますの」

「つまり、犯人の狙いは介旅と同じで風紀委員ですか」

「しかも、支部自体を爆破していることから、ジャッジメント風紀委員に深い恨みがあるのでしよう」

そう言いながら、白井は初春にお茶を差し出す。

初春は今やっている作業を中断すると、お茶を受け取り口を付ける。

「ん~、やっぱり介旅初矢と似たような動機でしょうか？」

「もしさうだとしても、それは唯の逆恨みですわね」

2人はそれからも事件について話しながら、作業を続けていった。

『…めでたす、めざ・めざ』

ひめ

『助けて・・・助けて！ 鎮樹いー！』

もう、こんなもの見せないでくれ！

『う・めん、ね・・・しづ、きい・・・』

やめてくれえ！！

「 ツ！？ ・・・ また、あの時の夢か」

青年 干城 鎮樹はベッドから起き上がると、カーテンを少し開け、外の様子を眺める。

「・・・夜、か」

外は既に暗くなつており、街灯がつき始めていた。

鎮樹は外の確認を終えると、部屋の電灯を点ける。

電灯に照らされた部屋には、テレビと冷蔵庫にパソコンが1台だけという生活に必要な最低限のものと言つても過言ではない家電しかなかつた。

鎮樹はパソコンの電源を入れ、起動する間に冷蔵庫からお茶のペットボトルを取り出し、一口飲む。

立ち上がつたパソコンで直ぐにインターネットに繋ぐと、ブックマークしているあるサイトを表示する。

そこは、会員制の裏チャットサイトで、チャットのログなどもサイト側が即座に消す為、危ない話をする人物などは大抵このサイトを使用している。

鎮樹はそんなサイトのあるチャットルームへと直ぐに入る。

表示されたチャットルームには既に先客があり、入室した鎮樹に気が付く。

『遅かつたわね、干城』

『悪い、干城』

チャット相手 干城 静稀はすぐに本題を話し始める。

『次はどうの支部を狙つ?』

『そうだな……一七七支部にするか』

『……良いの? あそこ、確か春夏秋冬君がいるといふよね?』

『良いんだよ。どうせ何時かはやることになるんだ』

『……そう、分かったわ。それじゃあ結構は明日の正午ね』

『了解した』

それだけ告げると、鎮樹は直ぐにチャットルームから出て、ブラウザを閉じる。

暫くそのままの状態でいた鎮樹だが、PCの電源を切ると、そのままベッドに向かい、倒れ込む。

「・・・・もう、後には引けないんだ」

そう呟くと、鎮樹はゆっくりと瞳を閉じ、眠りに甘く。

『やめてくれ！ そいつだけは ガハツ！？』

『たの、む・・・頼むから！ やめ カツ！！』

『静稀・・・静稀い・・・』

『ごめん、な・・・まも、れ・・なくて・・・・』

「 ツ！…？ …・夢、か」

少女 干城 静稀は肩を震わせながら、真っ青な顔のままベッドを出ると、直ぐに顔を洗う。

「 ……あいつらが、来るのが遅かったから。だから……私たちがあんな目に……」

静稀は下唇を強く噛みながら洗面台を掴んでいる手に力を入れる。

「 ……今日は一七七支部か。春夏秋冬君の居る支部……」

静稀は出来れば……と呟くと、コビングへと行き、服を着替える。

着替えを終えると、静稀は時間を確認する。

「 10時か……干城のところに行つてからだと、丁度良いわね」

静稀は髪を整え、服装に異常がないかを確かめる。

「…………うん、大丈夫ね。それじゃあ行こうかな」

そう言つと、静稀はその場から姿を消した。

「…………まさか、あの2人が犯人だとはな」

場所は変わり、天壌寺学園学生寮301号室。

現在、一光は自身の能力をフル活用して、今回の事件の手掛かりを探していた。

だが、予想外にも犯行箇所についての話をしているチャットを見つけてしまった。

一光は誰が犯人なのか確認しようと、そのチャットをしていた人物のPCに潜り込み、個人を特定する。

その人物が誰か分かつた時、一光は驚きと共に、納得してしまった。

何故、彼らが風紀委員ジャッジメントにそこまで執着するのかということに。

「・・・・あんな目に合えば、誰でも恨むか。普通・・・・」

一光は言いながら、財布と端末をポケットに突っ込むと、直ぐに風紀委員第一七七支部へと向かい出す。

「だが、そうどうしても、四季の居る支部はやめさせねえとな

一光は走りながら、廻に電話を掛ける。

次回

虚空爆破事件・空間交転

グラビトン
スペースチエンジ

第1-3話・虚空爆破（グラビーン）事件・空間交転（スペースチャージ）（前編）

前話に記載したタイトルから多少変更。前話の方も既に修正済みです。

第1-3話・虚空爆破（グラビン）事件・空間交転（スペースチャーンジ）

「へやつ！ 四季の奴、こんな時に電源切ってやがる……！」

一光は風紀委員第一七七支部へと向けて走りながら、廻に連絡を取
ろうとしていた。

しかし、肝心の廻がケータイの電源を切っているため、連絡が着か
ない状態だった。

「チッ！ 今そのまま走つて行つても、間に合わないか……」

一光は悪態を吐きながらも、ずっと走り続ける。

「・・・へやつ、 やるしかないか！」

直後、一光の周囲に微かな電撃が奔ると、一光の走る速度が急に上

がつた。

「頼むから間に合えよー。」

一光は猛スピードで道を駆け抜けながら、廻たちの無事を願つ。

「・・・・あそこね

ジャッジメント
風紀委員第一七七支部の外。

そこで今、2人の男女が支部の窓を見上げていた。

「ああ、それじゃあいつものように頼むぞ」

「分かつてるわ」

鎮樹はポケットから1円玉を数枚取り出すと、静稀に手渡す。

静稀は渡された1円玉を宙に軽く投げ上げる。

すると、次の瞬間には一円玉は全て、その場から姿を消した。

「…………悪いな、春夏秋冬」

鎮樹は廻に謝りながら、能力 シンクロトロ 量子变速を発動しようとした。

が、その直前に突如一七七支部の窓が開き、誰かが中から何かを投げ捨てるのが見えた。

それと同時に鎮樹が能力を発動。

そして、周囲にドオーンッ！と轟音を響かせながら、爆発が起きた。

「つー？ な、なんでだ！？」

「嘘？ 何で・・・？」

しかし、爆発が起きたのは一七七支部の中からではなく、支部の前の道路で起きていた。

2人は何故かと疑問に思つてゐる、突然背後から声を掛けられた。

「悪いが、やらせねえからな」

「

「ツー？」

声を掛けられた方へと2人は視線を向ける。

視線を向けた方に居たのは、端末を片手に持つて支部への階段から降りてきていた一光だった。

「振屋、か・・・」

「振屋君・・・何でここに・・・？」

一光は2人の問いに、素直に答える。

「悪いな。2人の昨日のチャットログを修復して知ったんだ」

「・・・そ、うか、お前の能力か」

「そうだ。ネットで何か手がかりがないかと思って探っていたんだが・・・まさか犯行計画の相談が行われているとはな」

一光は端末に表示したチャットログを2人に見せる。

それを見た鎮樹は、納得のいった表情で一光を見る。

「だったら、私たちが何故風紀委員を狙っているのか、分かつてゐる

ジャッジメント

わよね？」

静稀の問いに、一光は黙つたままゆっくりと頷く。

それを見た静稀は、だつたらと言いながらポケットから数十本の縫い針を取り出すと、直ぐに宙へと放つた。

次の瞬間、縫い針は先程の1円玉と同様にその場から姿を消した。しかし、一光はこの先に何が起きるか大体予測できたため、直ぐに横へと飛び退く。

刹那、一光の居た箇所に先程消えた縫い針が落ちてきていた。

「チツ、面倒な能力だな。『スペースジャンプ空間交転』だつたか？」

「あら、憶えてたの」

意外だわとおどけた表情で言つ静稀。

そんな彼女の様子を見て、一光は溜息を吐きながら静稀の能力の詳細を口にする。

「『スペースジャンプ空間交転』、自身の指定した立体空間内に存在する全てのものを別に指定した空間内に存在する全てのものに入れ替える能力。気体・液体・固体など問答無用で入れ替えるとかどんだけだよ」

「ふふ、じゃあここののはどうかな？」

そつと、静稀が右手を前に翳す。

一光は何をしたのかと一瞬疑問に思つたが、直ぐに周囲の変化に気が付く。

「ツー！ ぐつ、ガスかよ！」

「そつ、学園都市の地下にいくつもあるガス管。その中のガスと振屋君の周囲の空氣を入れ替えたわ」

「おい、干城。かずさね そろそろ終わらせやべ」

そつ言いながら、鎮樹は再度1円玉を数枚渡した。

「そつね・・・それじゃあね、振屋君」

バイバイと言いながら、渡された1円玉を2枚だけ放ると、能力を使用し一光の頭上へと移動させようとする。

「あ、あなた達！ 何してるんですかーー？」

そんな時、支部の階段から降りてきた初春が怒鳴り声を上げていた。

「・・・風紀委員！」

静稀は、初春の右腕に着けられた腕章に気付くと、放った2枚の1円玉を一光の方ではなく初春の目の前へと移動させた。

「・・・え？」

「悪いな。アンタ自身に恨みは無いが・・・じゃあな」

その言葉とともに、初春が爆発に巻き込まれた。

次回

虚空爆破事件・最大上昇

第1-4話・虚空爆破（グラビトン）事件・最大上昇（トップギア）

「…………やつたの？」

まだ爆発で起きた煙が晴れない中、静稀が鎮樹に近付いて聞く。

「まだ煙が晴れないからちゃんとは分からぬが、多分やつたと思う」

それを聞き、静稀はそうと一言だけ呟くと、段々と晴れていく煙に視線を戻す。

そして、煙が全て晴れた時、2人は気付いた。

爆発した場所に、何も残っていないことに。

「なつ！？ どこに！？！」

2人は周囲を見渡し、初春を探す。

と、そこで2人は後方からバチバチと音がしているのに気が付いた。
2人が音のした方に視線を向けると、そこには初春を抱きかかえて
いる一光の姿があった。

「・・・・あ・・え？」

「大丈夫か？」

未だ状況を掴めていない初春は、自分が一光に抱きかかえられてい
ると言う事実に気付くのに数秒を要した。

さらに、今自分がどんな格好で抱きかかえられているのかと(つこ)
とに気付くには、さらに数秒を費やした。

「 つー？／／／／ ちょ、下ろしてくださいー！／／／／」

因みに、現在の初春は、一光にお姫様抱っこされた状態だ。

「ああ、大丈夫そうだな。すまない」

一光は初春をゆっくりと下ろす。

初春は顔を真っ赤にしながら、ありがとうございましたと一言だけ言つ。

「お前・・・なんだよ、その能力・・・？」

と、一光が初春を離れた場所へ行くように言つていると、背後から鎮樹が一光に問う。

一光は初春が離れた位置に行つたのを確認すると、鎮樹の問いに答える。

「そう言えば、最近学園に来てないお前らは知らなかつたんだな。
俺の新しい能力の使い方、『^{トップギア}最大上昇』」

「『^{トップギア}最大上昇』・・・？」

「そう、俺の能力『電磁侵犯^{ハッキングパルス}』を自身に掛けることで、自身の身体に掛かっているリミッターを外し、尚且つブーストするんだ。まあ『^{トップギア}最大上昇』って名前を付けたのは廻なんだがな」

そう言つてから軽く溜息を吐く一光。

そんな一光の態度を見て、鎮樹はポケットから新たに1円玉を取り出しながら、大声で一光に問いかける。

「一光！ お前は、俺たちが何故こんなことをやつてるか知った上で止めよ!としてるんだよなあ！？！」

「……ああ」

「だったら！ 俺らが今することは話し合いじゃない！！ ただ単に」

そう叫びながら、鎮樹は逆のポケットからパチンコを取り出し、数枚の1円玉を纏めて宛がつと、一気に射出した。

「ケンカだあ！？」

「オッケー！ その方が分かりやすい！？」

一光は射出された1円玉数枚の場所を田で見て確認する。

直後、鎮樹が能力を発動し、1円玉が同時に全て爆発する。

「これなら

「

「 たんねえよーー。」

しかし、一光には爆発は全く直撃しておらず、無傷のまま鎮樹に突つ込んでくる。

「 チイーー もう一回だあーー。」

鎮樹は連続で数枚の1円玉を射出すると、一光は数m離れた位置へと回避する。

少しして、1円玉が爆発するが、直後にその爆発が一光の方へと不自然な形で迫つてくる。

「 なつー? くそつー。」

その爆発を聞一髪で回避すると、視線を今まで黙つていた静稀へと向ける。

「 静稀ー?」

「 私も・・やるわ・・・。」

そう言いながら、静稀は右手を前に突き出す。

それを聞いた鎮樹は、そつか・・・とだけ言つて、視線を一光に戻す。

「なるほどな。今のは干城かずさねの『スペースシェンジ空間交転』でこここの地下を通りいるガス管のガスを入れ替えたのか」

「ええ、そうよ。これで振屋君は簡単にこちらへは近づけないわ」

その言葉の直後、一光は一気に走りだし、鎮樹に近付こうとする。

だが、その途中で静稀が空間交転スペースジャンプを使い、1円玉を転移させる。

それを視認した直後、一光は左に回避するが、静稀は直ぐに対応し、1円玉を再度一光の目前へと転移する。

そのタイミングで、鎮樹が量子变速シンクロトロンにより1円玉を爆破させるが、紙一重の所で一光がバックステップして避ける。

「甘いわよーー！」

しかし、その行動をも予測していたのか、静稀は空間交転スペースジャンプにより地下からガス管のガスを転移させると、量子变速シンクロトロンによる爆発を誘爆させ、爆発を一光の方へといざなつ。

「・・・・・」

一光は自身に向かいくる爆発の波をジッと黙つたまま見つめている。爆発が目前にまで迫つて来た時、一光は一気にジャンプすると、爆発を上から抜ける。

「ぐつー（あと少し・・・保ってくれよーーー）」「

一光は爆発から抜け、着地した時に一瞬グラッと身体が揺らぐ。が、直ぐに持ち直し、また2人へとダッシュで攻める。

「くそつー（こうなつたらこれでどうだーーー）」

そう言いながら、鎮樹はポケットに1円玉の入った袋を取り出ると、一気に1円玉を全て周囲にばら撒く。

「やれ！ 千城！！
かずさね

「言わぬくてもーーー！」

その言葉に、静稀は空間交換スペース・ジャパンをフル活用し、ばら撒かれた1円玉同

士を円形を保つように転移させ続ける。

そして、一光がその一円玉の円の一つの近くを通りひとした時だつた。

「**量子螺旋**」
サイクロノロジ

一円玉がそれぞれ歪みを生じると同時に、円の中心で混ざり合つ。

「 ッーー? 」

それを見た一光は、直感でヤバいと感じ、即座にバックステップで後ろへと戻る。

直後、混ざり合つた歪みが爆発し、発生した爆炎は円柱　否、螺旋状に空へ向けて伸びていく。

「 何だ、今のは! ? 」

一光は先程とは違う威力の爆発とその形状に驚き、攻める手を止めてしまつ。

「 そうだな・・・そっちも教えてくれたんだ。」
そっちも教えてやる

よ

鎮樹はそう言いながら、手に持つた3枚の1円玉を一光に見せる。

「今のは俺と干城の能力の複合技、『量子螺旋』と言つてな。

複数の重力子の爆発的加速中にそれらを混ぜ合わせることで、螺旋状の歪みを生じ、結果普段の爆発よりも数倍の威力の爆発を生む技だ。

だがまあ、その重力子の爆発的加速の位置取りが難しくてな・・・。今は干城に協力してもらつてやつとなんだがな

そう言いながら、鎮樹は先程1円玉の空いた場所に手に持っていた1円玉を投げると、静稀はそれをその場で円形に維持し続ける。

「（くそ、厄介だな。あれをどうにか ッ！？）」

どうにかしないと、と思おうとした時、突如一光がその場に跪いた。

それと同時に、一光が纏っていた微かな電撃も見えなくなつた。

「ツクソ！！（こんな時にか！？）」

「ん？ どうしたんだ？」

一光の様子が変わったことに気付き、鎮樹が問いかける。

一光はその問いを無視して、無言を貫ぐ。

「・・・・まさか、その能力の時間の限界が来たか？」

「ツー！（バレたーー）」

そう、鎮樹の言つとおり、一光の『^{トップギア}最大上昇』の限界時間が先程來たのだった。

『^{トップギア}最大上昇』の制限時間は20分。

一光が能力を発動したのが一七七支部へ来る途中で、そこから支部までが約11分。

さらに支部の中に入つて転移してきた1円玉を投げ飛ばすのに約1分。

それから今までのやり取り全てが総計して約8分。

よつて、一光の能力は強制的に解除されてしまった。

「どうやら凶星のようだな。だったらこれで終わりだーー！」

そう言つと、鎮樹の周囲に維持された1円玉のいくつかが一光の付近へと転移してくる。

それを見て、詰んだと思った一光はぐつと目を閉じる。

が、次の瞬間、轟音と共に砲撃の様なものが1円玉が全て吹き飛ばされる。

その場にいた全員が何事かと思い、全員轟音の元へと視線を向ける。

「全く・・・あんたはホント、最近の事件の中心近くによく居るのわよね」

そこには、短い髪を搔き上げ、呆れた顔をしながら一光を見ている少女　学園都市超能力者第3位、『超電磁砲』御坂美琴が立っていた。

次回

虚空爆破事件・真解決
グラビトン

第15話・虚空爆破（グラビトン）事件・真解決

「ツー？ まさか、常盤台の『超電磁砲』！？」

レールガン

突然現れた御坂を見て、鎮樹と静稀はかなり動搖していた。

そんな2人を御坂は睨むと、右手で弄んでいたメダルをレールガンがいつでも放てるように構える。

「んで・・・あんた達が今回の事件のもう一つの犯人って訳？」

「ええ、そうよ・・・」

静稀は御坂の周囲に円形に配置された1円玉を転移させる。

それに少し気付くのが遅れた鎮樹が、咄嗟に能力を発動しようとする。

しかし、それより先に御坂の電撃が1円玉に全て直撃し、跡形もなく消飛ばされる。

それと同時に、御坂がレールガンを撃ち放つと、2人の周囲の1円玉を一気に消飛ばした。

「そ、そんな・・・・・

「マジかよ・・・・」

2人は成す術も無くなつたのか、その場にへたり込む。

その様子を見た御坂は、2人に近付いて話し掛ける。

「それで、なんであんた達は風紀委員を襲つてたのかしら？」
ジャッジメント

御坂の問いに、2人は黙つたままだつたのだが、意外なところから返答が来る。

「・・・俺が話そう

「は？ あんたが？」

御坂は、一光が2人の動機を話すと言つたことに疑問を浮かべる。

「なんであんたが知つてんのよ？」

「・・・まあ、ちょっとな」

そう言つと、一光はゆっくつと話し始めた。

1年近く前、千城^{かんじょう} 鎮樹^{しづき}と千城^{かずさね} 静稀^{しずき}は恋人同士だった。

それこそ、周りが羨むほどにラブラブで、幸せの絶頂と言つても過言ではないほどに。

しかし、そんな彼らの幸せな生活も、長くは続かなかつた。

放課後、2人は何時もの様に仲良く腕を組んで出かけていた時、ガラの悪い数人のスキルアウトとぶつかってしまい、難癖付けられて近くの廃ビルにまで連れてこられてしまった。

その時の2人のレベルは強能力者^{レベル3}になつたばかりで、演算に多少の時間が掛かるため、鎮樹は能力の発動前にスキルアウト数名に殴ら

れ、気を失つ事は無かつたが、その場に倒れ込んだ。

そして静稀は、鎮樹が殴られた後、スキルアウトの男たちに囲まれ、抵抗はしたが敢え無く抑え込まれ、そして

「
輪姦まわされた」

干城は、スキルアウト数名に犯され、そして

一光から語られた話を聞いた御坂は、顔を驚愕の色に染めていた。

しかし、それでも何故風紀委員ジャッジメントを襲うのかが分からなかつたが、一光の次に語られた話を聞き、理解する。

「そして男たちの輪姦ジャッジメントが終わつた時だつた。風紀委員ジャッジメントが2人、その場に現れた」

それで、男たちは捕まり、事件は終わるものと鎮樹と静稀は心に傷を負いながらも思つていた。

だが・・・・・悪夢はここからさらに加速していった。

「その場に現れた風紀委員ジャッジメントはどうやらそのスキルアウトと繋がりが合つたらしくてな・・・・・干城を犯す輪の中に加わつたんだよ」

「なつ！？ そんな！？ だつて風紀委員ジャッジメントでしょ！？ そ

んなこと

」

する訳ないと、言い切れるか?」

「

一光の言葉に、御坂は反論できず、押し黙る。

それを見て、一光はさらに離しを続けていく。

それからは、さらに地獄絵図が進んでいった。

何時間にも渡つて犯され続けた静稀は、もつされるがままの人形の如く、干城を閉ざしていた。

さらに鎮樹はその間、他の男たちのストレス発散のためのサンドバッグにされていて、もう殆ど意識は飛んでいた。

そして、現場に他の風紀委員ジャッジメントが来て、その事件が終息を迎えるまでは、さらに数日を要した。

「ちよ、ちよっと待つてー、いぐりなんでも風紀委員ジャッジメントが見つけるまでに時間が掛かり過ぎよーー。」

「ああ、だから俺はちょっと調べたんだよ。どうしてここまで時間が掛かつたのか。何が原因だつたと思うよ？」

一光の問いに、御坂は真面目に考えるが、思いつかず首を横に振る。

「原因は・・・他の風紀委員の職務怠慢が原因だった」

「それってどういった事?」

一光は話を続けながら、端末の hologram を使用し、御坂の前に地図を表示する。

「事件現場がここ。んで、事件現場付近を担当していた風紀委員の予定警邏ルートがこれ」

そつ言いながら、地図上に赤点と青い線でルートが表示される。

表示されたルートは、現場のビルの中に入つていくなつていた。

見た限り、廃ビルと言つ事からビル内に異常がないかを確認しなければならないようだ。

「それでこっちが、実際にそこの風紀委員が警邏したルートだ」

直後、青いルートにほぼ被る様に、赤いルートが表示される。

しかし、1箇所だけ赤いルートが青いルートにかぶつてない箇所があつた。

「これ・・・ビルには入つてないじゃない!?」

「そう、そこ^{ジャッジメント}の風紀委員はその部署についてから1年近く経ついたらしくてな。その頃から、こんな風にビル内の警邏を怠つていたようだ」

「・・・」

あまりの事に、御坂は無言になつっていた。

「分かつたか? 」^{ジャッジメント}といつらが風紀委員を襲うのは、^{ジャッジメント}風紀委員がスクリアウトと一緒に犯したのと、ちゃんと職務をしていれば早くに解決したのにと言つのが理由だ」

「だつたらなんで、他の風紀委員まで襲う必要があつたのよ!...」

御坂の言葉に、一光は黙り込む。

実際のところ、一光自身もいまいち理由が分かつてなかつた。

確かにその事件が切つ掛けになつてゐることは明白だ。

しかし、だからと云つて関係ないジャッジメント風紀委員を襲うのかは分からなかつた。

一光が何故かと考えてみると、別の所から返答がやつてくる。

「 そんなの、分からぬからだ」

「 「えつ？」」

声のした方に視線を向けると、鎮樹がゆっくりと立ち上がりながら、金属の棒らしきものを構えていた。

「人間なんて、表面ではどんなにいい顔をしててもなあ！ 心で何を思つてゐるか、裏で何をやつてるか、分からねえだろおが！！だから、俺が！！ 俺たちが懲らしめていつてんだよ！！ こいつもなあ！！！」

そう怒鳴りながら、手に持つていた金属の棒を御坂と一光とは逆方向 初春の居る方へと投げていった。

「 え？」

「なつ！？（不味い！　あの距離じゃあ！…）」

咄嗟のことでの、御坂は反応が遅れてしまい、直ぐにはレールガンが撃てなかつた。

そしてすぐに、金属の棒は空間に生まれた歪に飲み込まれた直後、周囲一帯を包むほどの爆発が発生する。

「つー！？ 初春さん！？ 初春さーん！？！」

御坂は初春の無事を確かめるべく大声を上げる。

だが、鎮樹はそんな彼女を見て、不格好な笑みを浮かべた。

「は、ははは、どんな能力を持つてるか分からねえが、流石に今は

は

「

と、そこで鎮樹の言葉は途切れ、続くことは無かつた。

鎮樹は言葉の続きを紡ぐことは無く、その場に倒れてしまった。

そしてその場に居たのは、最後の力を振り絞り能力を使用した一光と、その一光の肩に担がれている初春だつた。

「ああ、悪い。今下ろすからな」

一光は初春をゆっくりと下ろし、初春はすぐに御坂の元まで走つて行くと背中に隠れて一光を睨みつけた。

「……………が、なんにせよ、これで終わりだ」

一光のその眩きからそう時間が経たずに、警備員と風紀委員
みがその場に来て、鎮樹と静稀を連れて行つた。
アンチスキル ジャッジメント

そう・・・これでこの事件、『虚空爆破事件』^{グラビュートン}は本当の終わりを迎えたのだ。

次回

虚空爆破事件・事件後
グラビトン

第1-6話・虚空爆破（グラビアン）事件・事件後

「……………」

「……………」

あの後、虚空爆破事件の犯人として鎮樹たちが連れて行かれてから、一光が帰ろうとしたのだが、そこで初春・廻・白井に捕まってしまい、一七七支部へと連行されていた。

因みに、御坂はさつと帰されたらしい。

「能力の無断使用も一応補導対象ではあるのですね。ええ、『一応

” ですので

白井は『一応』を強調しながら、手に持っていた今回の事件に関する始末書の書類を一光の前のテーブルの上に置く。

「・・・・・ 一応聞くが、これは？」

「今回の件で破損した街路樹や舗装などの修繕費用の額ですの」

「それを俺にどういふと?..」

「取り敢えず、サインして貰いまし」

そう言いながら、白井はボールペンを一光へ差し出す。

しかし、一光はボールペンを受け取らうとしなかった。

サインをしてしまうと不味い、と言う感覚が目の前の書類からビンと云わってきているからだが。

「・・・・・いや、なんで俺が

」

「 サ・イ・ン! して貰いまし!..」

「・・・・・イス、マム」

観念したのか、諦めたのか、一光は仕方なく目の前の書類にサインする。

サインを書き終えるのを確認した白井は、直ぐに始末書の書類を抜き取ると、直ぐに支部の入り口付近のテーブルに座つていた固法の所へと持つていく。

「 ってちょっと待てえ……」

と、それに気が付いた一光が即座に白井を止めようとするが、時すでに遅し。

書類は固法の手に渡つており、もう取り戻すのは不可能だった。

「 ……おい、白井」

「 なんですか、振屋さん？」

「 今の書類は一体何の書類だ・・・？」

一光は先程、一瞬だけ書類に記載された文字を視認することができた。

が、その確認できた文字を、一光は信じたくない、その為、白井に確認する。

「決まつてますの。ジャッジメント風紀委員の適性試験を受ける為に必要な契約書ですわ」

「だから待てえ！ 僕1回サインしただけ全部にカーボン紙挟んでたのかー？」

「ええ、まあそうですね。ああ、『心配なさらいでください。学園都市特製のカーボン紙なので、弱い筆圧でもクッキリ下まで写りますわ』

「そんな心配しないわあ！！ そもそも俺は風紀委員に何ぞなる気はジャッジメント」

「なる気は無い」と言おうとした時、不意に肩を叩かれる。

一光は視線を後ろへ向けると、凄い形相の廻がすぐ後ろに居た。

それに一瞬驚いた一光は、瞬時に後ろに後ずさった。

「いい機会だから試験受けろー。つか俺が前々から誘つてんだから、今回くらい素直に受けろー！」

「お、おう・・・分かった

廻の有無を言わさぬ迫力に怖氣づき、一光は素直に頷く。

それを確認して、廻は満足したのかソファに座ると田の前に置かれたお茶を啜る。

白井は一光に試験に関する書類を封筒に入れて渡す。

と、不意にPCを使用していた初春があつ、と声を上げる。

「どうかしたんですの、初春？」

「あ、いえ、これなんですが・・・」

そつ言いながら、初春はPCのディスプレイを一光たちの方へと向ける。

画面には、今回の事件の加害者である鎮樹と静稀の罰則に関するメールが届いたのか、内容が表示されていた。

白井はメールの内容を確認すると、んん?とおかしいと言つた感じに唸る。

「天壌寺学園への強制復学と8ヶ月の奉仕活動・・・・つて、強制復学?」

「微妙な処罰だな。あいつら、事件に遭つてからは全く学園に来なかつたから、強制復学は分からなくもないが」

「実質、処罰は8ヶ月の奉仕活動だけって訳か？」

「まあいいだろ。今回の事はこれで終わり！」 それじゃあ俺はそろ
そろ ふ 「

「そろそろ帰るわ」と言つて帰らうとするが、即座に廻と白井に肩を掴まれ、ソファへ座らされた。

「まあまあ、まだ大丈夫だろ。それに今日は適性試験に関する説明とかするから、もう暫くは帰れないぞ」

「ちよー!? そりやなこいつてー!」

「問答無用ですのー。せひ、適性試験は明日ですのよー。」

「つてちょい待てやあ！ 明日つてなんだよ！？」早すぎだらお

「それじゃあ適生試験の説明始めるぞ。まずは

「うなつたひアーティストやあーーー」

・・・・・とまあ、変な感じになつてはいるが、そんなこんな

で虚空爆破事件は幕を閉じた。

これにて、第一章・・・虚空爆破事件編

次回、第三章・・・幻想御手編 研修

完

第1-6話・虚空爆破（グラビアン）事件・事件後（後書き）

“後書きと書いつ名の駄弁り場”

遅くなつて本当に申し訳ありません！

と言つ訳で、微妙な感じで第二章終了！

次回からは幻想御手編レベルアップへと本格突入です。

と言つても、一光視点なので結構オリジナルなものが多いかもですが・・・

では皆様、第一章の拝読、ありがとうございました。

次回第三章もお読みいただければありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0782z/>

とある科学の電磁侵犯（ハッキングパルス）

2012年1月12日23時29分発行